

Vol 141 遺失

愛護会が京成電鉄と会談し、要望し、実行を約束したこと。その1年後の現在。

ふがんど

第142号

1982.1.26

谷津干潟愛護研究会
 市川市本北方二丁目三五ノ六
 電話 0476-31-1666
 文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
 1980.6.3

谷津干潟環境美化委員会(主婦中心)は、京成電鉄(三人)と谷津遊園(園長以下四人)との三者会談において、次の事などを申し入れた。(尚、例の埋め立て問題はここでは書かない)。

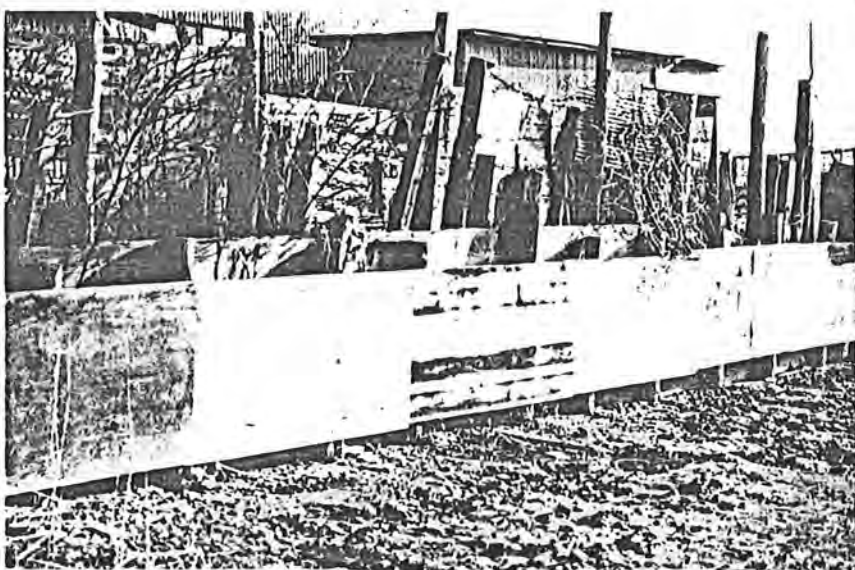
一、谷津遊園が干潟に出ている全ての

ゴミをとり除く。二、客が干潟へカンヤビンなどを投げないように、看板などしかるべく策を講ずる。三、干潟との境には、つい立てなどのヘイを作る(鳥の為)。四、ゴミを出さない、出ないようにする。五、水刃をキチンと。六、用あって入園する当会々員はタダにする。全て、OK。



よしずと線路の枕木で、このようにしてあります。自然味があるので、中々いいと思う。

厚いベニヤ板で、とにかく、余り出ないようにしてある。向う側で、園内のゴミが集められている。「お金がない」、それが京成の口グセ。



干潟に出ているゴミを清掃した後、水ぎわをキチンとした結果。エノウ袋をナナメに積んで並べてあります。右の白い棒は看板。

こういう看板が、干潟に沿って立ってくれました。10本ぐらいあります。少しは、キキメがあることを希望するのみです。

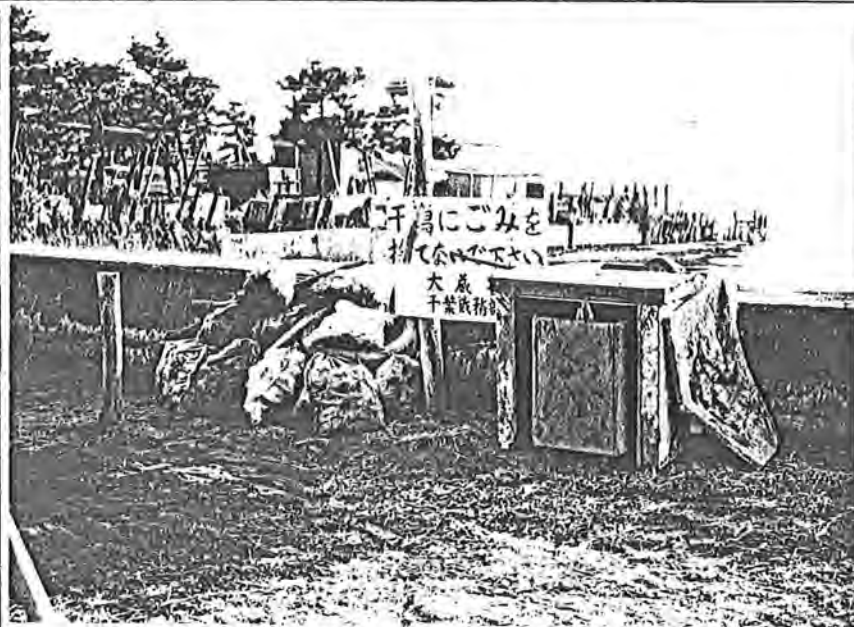


私について来て、会談に参加してくれた主婦の方々、どうもありがとう。

お振込は千葉銀行012-54253
 谷津干潟愛護研究会

●その頃の私……私有地だから勝ち目はないけど、オレは、こころんでとタダで起きないぞ！

◆ 46回のクリーン作戦の戦果



主婦・幼児(2名)・森田でこんだけ

…ゴミたいなもの、ある方のいたたきもの。でも、こわさかしてしまいました。

森田は、「桜並木の会」の会員であります。組織としてしっかりしていき、会合も和気藹々 意見をよく出ます。野鳥の会や千歳を守る会が、すでに数年前に失ってしまったものを、柔軟にして、広く、生長せんとする力など、運動によって最も大切なものを、この会はずり。

どうです、こんなにもやったんですよ、スゴイでしょう。ここには、ゴミらしいゴミは、殆んど出ていません。多くは流れて来た物と、土の中から出した物(石・ガラスなど)。でも、やろうと思えば、きれいにしようと思えば、まだく一人でも、一本の手でもノドから手が出る程欲しいのです。バケツや袋を持って、石ころ、ガラスやビンの破片、その他いろいろなもの、一つ一つ根気よく拾い続けております。それが、現実なのです。だから、とってど時向がかかすのです。でも、私産は、一つく拾っていつてます。そして、月に一度ずつ、上の空裏のように集めております。土の中のゴミを、一つく取り出してやると、ヤバヤになる程、カニヤゴカイが、いっぱいすむようになりますのでした。水辺の草も、それに運んで多く茂ります。私産は、それがいちばん、何よりとうれしいのです。最大のナグサメです。

他の地域から

散り際知った？ 桜並木



「環境保全」を旗印にしたばかりに、大災害を招いた結果、ようやく「防災」優先に動き出した町がある。東京都隣接した千葉県市川市の野鳥の会が、市町協力を進めて「大雨が降れば、間違いない大洪水」と言われ、河川改修が必須となっていた。昨年十月の台風24号で浸水被害約五千戸という悲惨な被害を受け、これまで川沿いの桜並木の伐採を伴った改修事業に反対していた住民運動も、ようやく火となり、県市は、桜並木のメンテナンスと昨年未だ用地買収など改修事業の推進に力を入れ始めた。



1時間20分ほどで洪水。ふたんの真川は細いところ、幅一三メートルしか水が流れておらず、ちょっと汚れた小川といった存在。川そのものより川沿いの一・五メートルにわたって植えられている桜並木で真川の名を知り、多くは、計三九百九十本ある桜は、花見シーズンだけでなく、夏には都市部で貴重な木陰として付近の人たちに親しまれてきた。

「自然環境の破壊は許さない」と市当局や市議会に猛烈な働きかけを続け、高橋陽雄市長も賛同を表明し、市民運動を無視するわけにはいかず、さらに県土木部も地元、市川市と手を結ぶ。このまま治水対策も橋の修理や川底の掘り下げ程度にとどめて、そこへ、台風24号による豪雨が床下浸水に追い、おまけに「おな」移ってきたことに加え、昨年十一月

伐採反対論下火に 大洪水、河川改修を後押し

日本経済 1/9



「真土部」と呼んでいる。避けられぬ床下浸水。もともと、この河川改修が、桜並木を完全に姿を消すことになるのでは、との見方が強い。町水機が持つ田畑が宅地になり、土の道がコンクリートになっていくわけではない。五年から十年に一度の確率という時間間隔五十。状況が今後も続けば、真川流域は「桜並木はないけど、洪水はある町」になりかねない。

● 教えて下さい。自然保護って何ですか？ その答えを「後姿」で書いて下さい。

ふかんど

オ143号

1982.1.27

谷津干潟愛護研究会
 〒272 市川市本北方二丁目三五ノ六
 電話 0476-511661 511668
 文責 大森田三郎

会費 年2000

創刊
 1980.6.3

皆さん、

六月に必ず来て下さい

是非来て下さい。そして見て下さい。

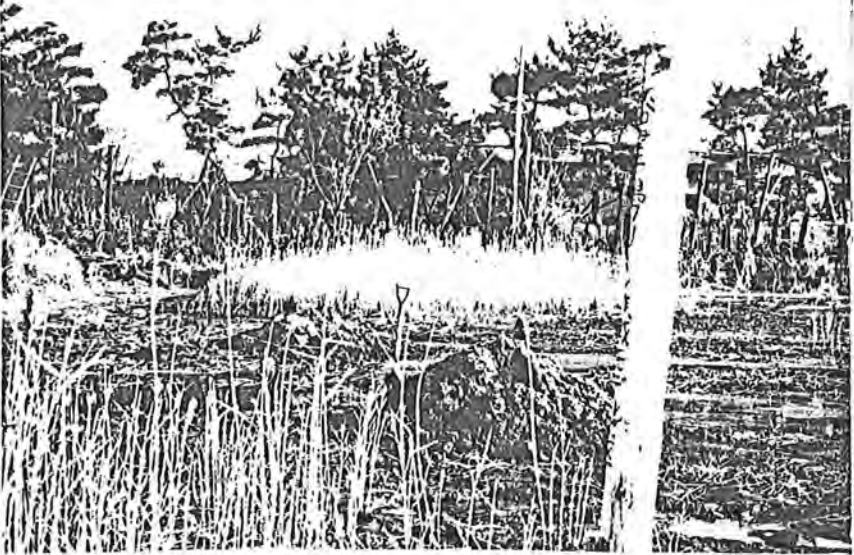
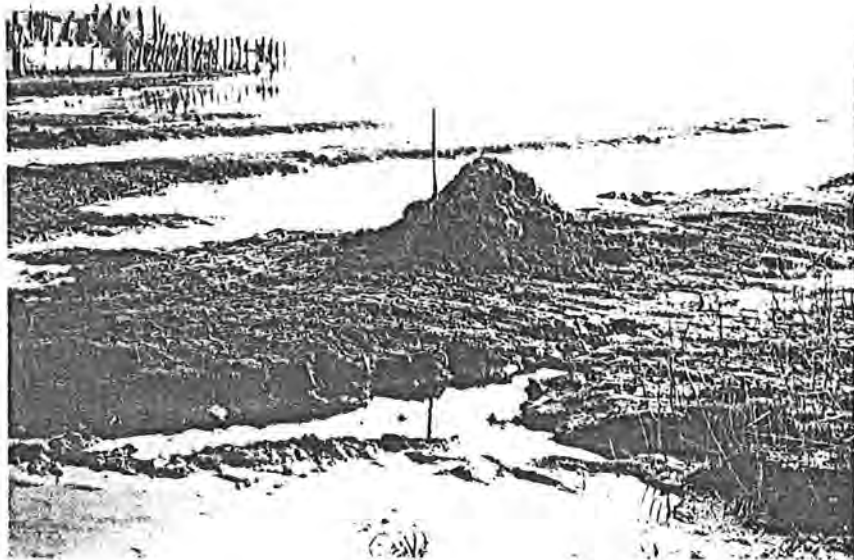
次に、聞いて下さい、知っている人に
 ・二年前、ここがどんな所だったかを。
 比べて下さい、その時と今とを。目に
 みるような緑の水草が水辺に生い茂り
 、風に波打って水面に浮っています。石
 やガラス、鉄くずや灰の下に埋もれてい
 た所には、どのすごい数の「体操がニ」
 が、そのちっちゃなハサミを上下に振っ
 て、いっせいに体操してります。スコッ

見えた黒っぽい地面
 は全部、私産による手
 作りの干潟です。

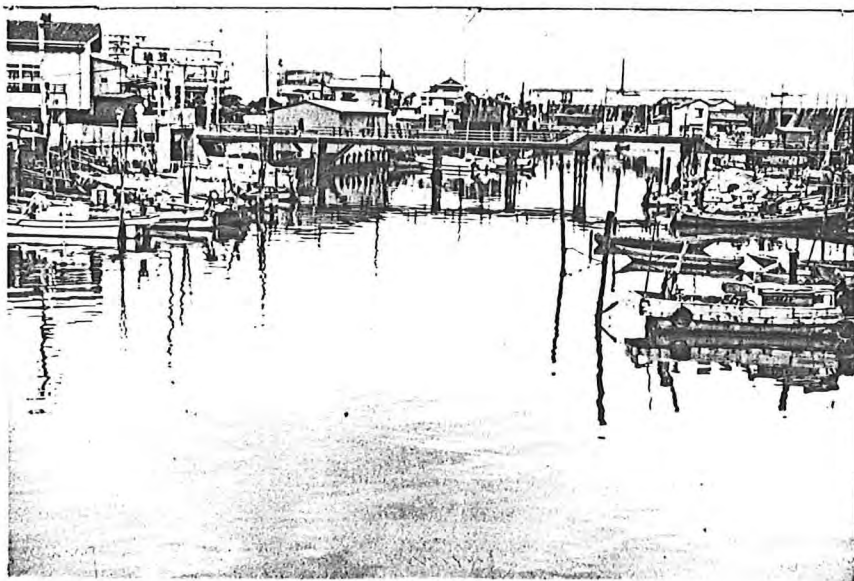
ヨシ野の位置、大きさにと十
 分心を配って、造成と改善が進
 められております。

潮だまりと干潟の組み
 合わせは、困難とユメが
 あります。

プと一輪車で作った干潟や砂浜で、カモ産か
 のどかに休んでいます。潮だまりでは、カモ
 が氷のたりエサを食べています。耳をすませ
 と、「ビチク」という音があたりで聞えま
 す、ゴカイの息をすする音です。
 昨年は、大部分の労力が、不法投棄のゴミ
 をそうじすることであつたばかりで、潮だまりにすさこ
 。干潟や潮だまりと、どうにか形にすること
 で精一杯でした。でも、半ば更張ではありま
 したが、予想していたよりはるかにすばら
 しい出来で、ビックリしました。クリーン作
 戦、テーブルベンチ、松の木、フローネの
 小屋、看板、友の会、観察や調査、人々への
 説明、通信箱など共に、干潟の造成・改善
 を進めていきます。よろしく。



むかし、ここに「納涼台」がありました。



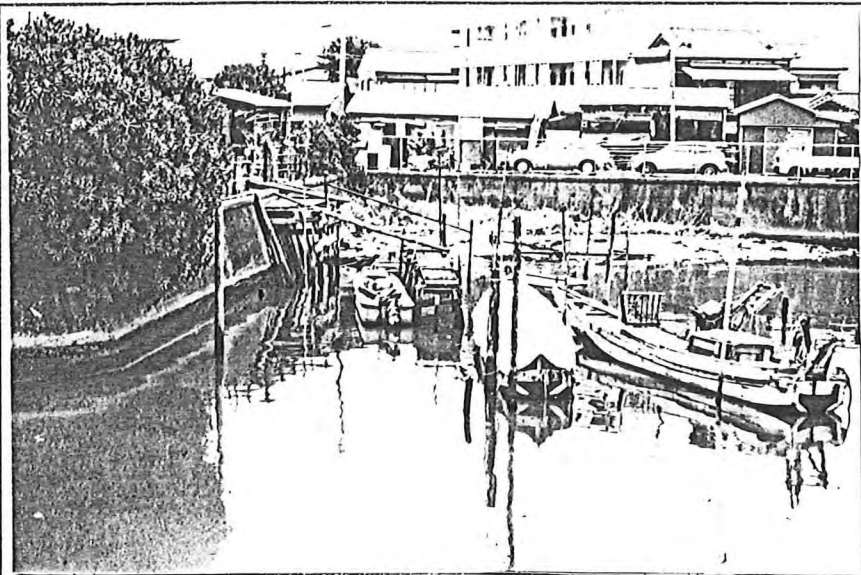
それはもう、30年以上とむかしのことです。

写真の、右側の堤防の所にありました。納涼台は、堤防から突き出ていて、床を干潟に立てた、たくさん^の木の柱で支えていた。だから、潮がくると、みんなの足許、納涼台の下は「海」

になっってしまうのでした。波が立ち、その波

が、堤防に「ザブく」打ち寄せる音や、カキヤフジシボがスキ向のなり程、盛りくり上ってくっついていて木の柱に「ピタく」と波のぶつかる音が聞えるのでした。古い柱のところには、カキなどの所々から海藻が生えていて、満ちてきた潮の中で「ユラく」とゆれていました。そして、魚の群があちにとこっちにと泳いできて、「クネく」とうんしように動きまわるのが、納涼台から午にとるように見えました。

潮が引くと、納涼台の下もそのままのまわりど、穴から出て来たカニの姿がいたる所で見えました。あるものは甲ら干しをして、又あるものはモゾく歩きながらハサミでエサを食べ、そして他の者は体操していました。イソギンチャクやシオフキが、てんで勝手に「ピュン／＼」と潮を吹き上げてをりるのでした。夏の、夕日にキラ／＼と光る波向の向う、遠い沖に白帆が浮かんでいるのが見えました。



生キズが

しこたま出来たか

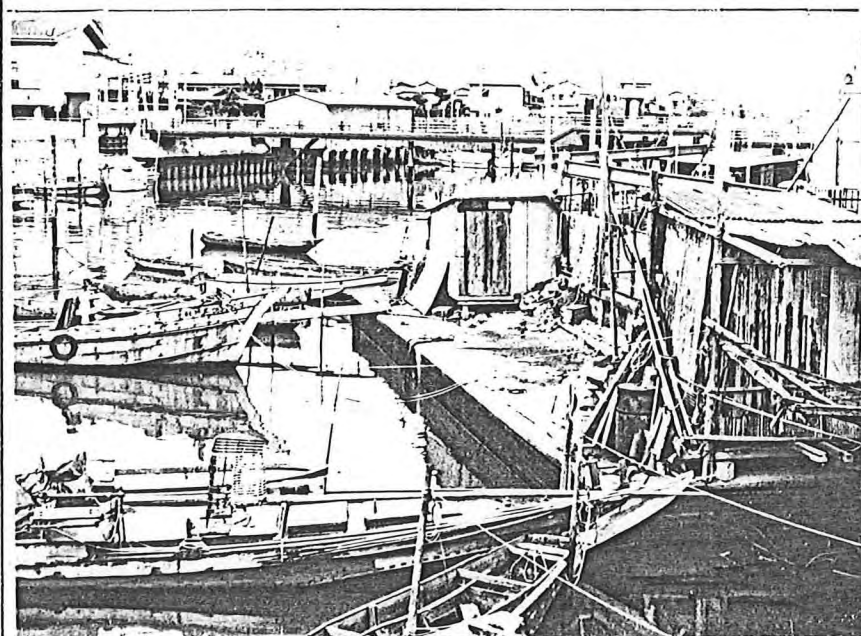
やけ肌

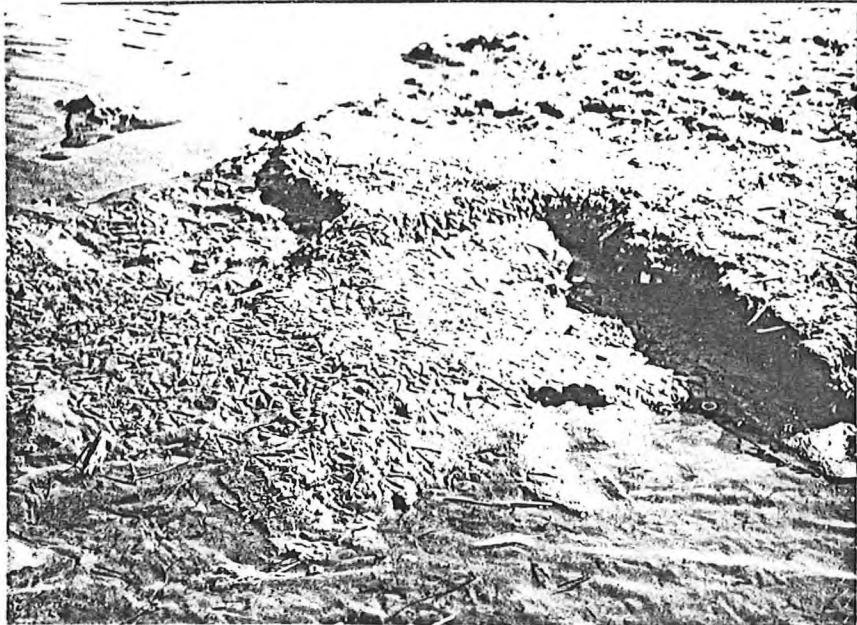
今日のゆらぐの

うみあそび

ふかんど太郎

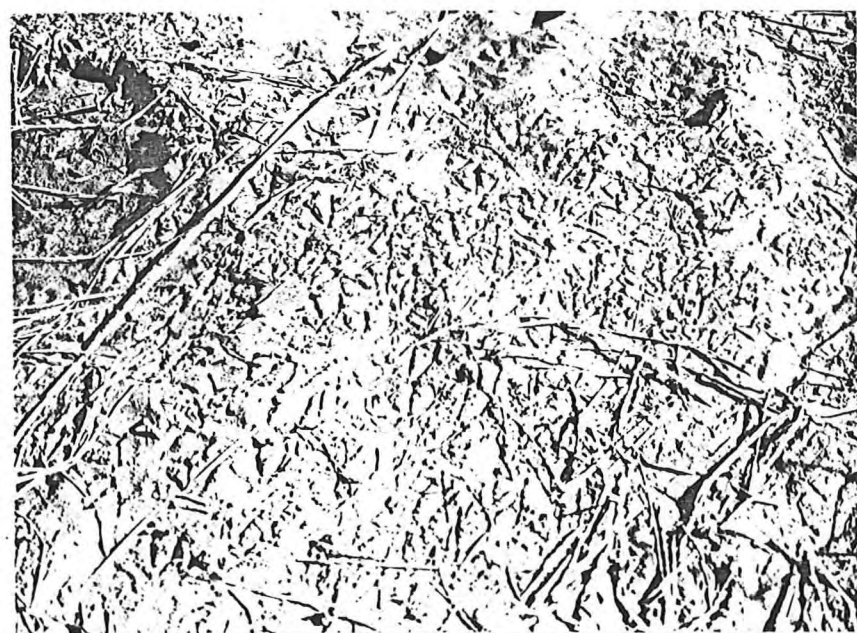
行状記



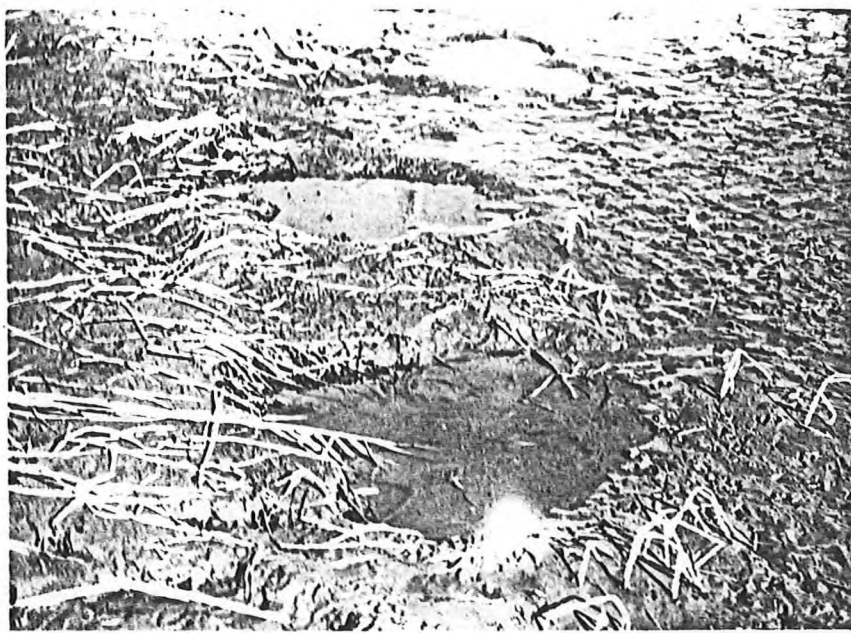


掘られたまわりには、鳥の足アトがいっぱい。こうなると、石も自然と出てくる。

造られた干潟は、下の写真のように、鳥の足アトだらけなのです。



上下の写真は、昨年私産が造った干潟です。水草が生え、ゴカイやカニがものすごく増えました。とたんに、カモ・シギ・チドリ・カモメがここに来ました。たくさんのデコボコの穴は、カモが掘ったものです。



寒風吹きすさぶ中、毎日進められてい
る。道具は、スコップ、一輪車、エノウ
袋、バケツ、クマチ、長ぐつ、大きなゴ
ム手袋など。
清掃は、主婦中心の「谷津干潟環境美
化委員会」がやってくれている。しかし
、力のいる土壌作業は大変な重労働であ

り、冷たい風を体に受け、水の中でもザブザ
ブ踏み込むので、「谷津干潟愛護研究会」が
やっている。シャツ一枚でも、汗ばんでくる
仕事。一日、三時間が限度である。自然保護
団体は全く見向きもしません。が、私産には、
カニやゴカイ、水辺の植物、そして、渡り鳥
のゴコロでの生活の姿が、何よりの報りである。

ふがんど

第144号


1982.1.28

谷津干潟愛護研究会
千代田市本北方二丁目三五番六
号272 電話 0476-31-1666
文責 森田三郎

会費年2000

創刊
1980.6.3

迷うことなく、地域の現実・必要を選びます

私には、幾百の自然^保護論議よりも、の方がいいよ---

千葉の千潟を守った会、千葉県野鳥の会 「谷津千潟友の会」に

消極的・否定的な態度でした

「谷津千潟友の会」の発足にあたって、会長、連絡係を引き受けてくれた高橋氏、長塚氏など、その他の方々におわがしたいと思います。

実は、千葉の千潟を守った会や千葉県野鳥の会に、「友の会」の話しを持っていったのは、私、森田の個人的考え、いはば拙断によるものでした。かと言って、友の会の皆さんが、他の団体に相談することや協力をお願いすることに、反対と

お風呂だ、お風呂が一番だ！

寒いですわえ、皆さん。今日(28日)雪が降りました。千潟と寒いです。冷たい北風をまともに受ける、身を隠すものかなり吹きさらしですからわえ。

そんな所で、何かをやるうと思っつと、やり始めてしまえばいいんだけど。その前の、着物を着がえるって、大なる勇氣と決断力がいるんですよ。とっともやっつた時だって、やっぱり、寒いや。

皆さんは、この森田が、いつでも情熱に燃えて、張り切って、強き意をどて確固たるビジョンを描き、勇往邁進し、な

らうのではありません。ただ、他の団体の今までのようすや、現在の活動力を見て、殆んど期待するのはむずかしいのではないだろうか、という意見が圧倒的だったのです。つまり、「ヤル気があるとは、どう見ても思えない」、ということでした。

しかし森田は、そういう「友の会」の皆さんの考えを十分知りつつ、そして又一方で、「さしかしたが、友の会のことが一つのきっかけになるのかも知れない」という、わずかの希望を持っていました。だから黙って、誰にも連絡せずに二つの団体へ行ったのです。「友の会」の人と、森田と、内心では確信しています。たとえ中心的な人は否定的でも、会員の中には必ず、賛成してくれよう人がいる事を。

おかつ、ガンバッテルン、だと、そう思っていることでしょうか。わかっております。そう思われることの原因は、全て私にあるのですから。景気のいい心情を、言葉でずいぶん書いて来ました。調子乗っつと思うがま、パカパカと、アトで、殆んどの場合、自己嫌悪にあちりるとわかっていても、私は書いてしまわうのでした。

ところで皆さん、オ三者の目から見て、そのガンバッテルンと思われていた森田が、千潟でハナ水を取らしてゴミ拾いをしていた時、その時の森田の脳裏にアリくと想い描くのは、唯一お風呂に入った時の姿だけなのです。

「湯舟にて、どっぷりつかって、しみじみとお風呂に入ると、人生観が変わります。今日の千潟の、寒さかなし」

漁師まちの船溜まり



ふかんど

№145号

1982.1.29

谷津千潟愛護研究会
 〒272 市川市本北方二丁目三五番六
 電話 0430-511666
 文責 木村 三郎

会費 年2000

創刊
 1980.6.3

海っばた

昔、私の小さい頃は、この辺一带をそう呼んでいた。つまり、町のはずれで、海の端（はた）だから、そんなふうにならされたのである。参考までに、さう少し上流の海老川近くの所を、これもまた「川っばた」なんて言われていたのだ。

で、「海っばた」と「川っばた」の境目はどこかと言うと、これはまた判然としないのである。知ってるという人に会ったことをいし、聞いたこととなり。しかし、いろんな人がこれら二つの言葉を使うのを聞いて来て、みんなまとめてみると、ある程度の所は、この辺じやないだろうかと思いがつく。この辺とは、つまり、上の字真の右半はすぐ千葉街道であり、千葉街道より海がわの方面は田舎らしく、「海っばた」だった。それに対して向慮がなく、「川っばた」というのは、千葉街道にかかっている橋（船橋橋）より、さう一つ上流にかかっている橋がある。八千代橋だが、この橋より上のオカそうだった。

それで、船橋橋と八千代橋の間は、「海っばた」と聞くこととあったし、「川っばた」と聞くこととあった。だから、「この辺」は、二つの言葉で呼ばれていたわけである。

字真は、千葉街道から「ラポート」のオに来た橋の上からである。その頃ここで、バイ、渡りかニ、バカガイ、ダシ、キスがとれた。船が動けなげ、海藻を流して来たし、サヨリの大群と来たものである。

誰かから、「皆さんはどんな事をしていますか？」と聞かれたら、会員の方は下記の如く答えて下さい

よく人から聞かれます。又、皆さんも知っておいて下さい。ご面倒な人は、これをコピーして、渡してくださいとお願いいたします。

・ テーブルとベンチの修理と作成

(数は約百三十位)

・ 谷津千潟通信箱の管理 (三ヶ所)

・ 日曜日・休日には、一般市民の為に、

千潟とそこにいる生物の観察・説明などをしている。個人的には、普段の日にも望遠鏡を使ってとらっている。

・ 松の木の手入れ (約五十本)

・ 千潟の清掃と、日曜日・休日ごとに会員かしている。又、週辺や水路ぎわもしている。その他、個人的には普段の日にも。

・ 「谷津千潟水上観察舎」の管理。

・ 子供達が千潟に降りて、カニなどと触るようになる為の、ハミゴの管理。

・ 谷津千潟に、季節ごとに飛来する渡り鳥の種類とその数の調査 (一週間毎)
↳ 石川 勉 氏 協力

・ 谷津千潟クリーン作戦 月二回

・ オ三日曜 (一般) オ三火曜 (主婦)

・ 「谷津千潟・鳥の情報板」の管理。

・ 「谷津千潟の行事案内板」の管理。

・ 「谷津千潟の案内・説明」の看板の管理 (七本)。

・ 会報「小かんご」の発行。

・ 会合と会員の情報交換。

・ 埋め立て地に繁殖する、「渡り鳥の繁殖調査 (コアジサシ・ミロウドリ・コウドリ)」

・ 千潟と埋め立て地、そしてそこに生息する渡り鳥を中心とした生物の調査、案内、撮影など。

・ 「谷津千潟展」と、公民館、銀行、喫茶店などで。

・ ゴミの不法投棄や油のタレ流しを防止する為、千潟のまわりや水路を見まわっている。

・ 「フローネの小屋」の管理。

・ 千潟の清掃で集めたゴミと、大蔵省・県・市・京成電鉄・建設会社に依頼して持ち去ってもらうこと

・ 夏期、流木・竹・アミで日除けの小屋と、地域の人、バードウォッチャーの為に作っている。

・ 他の団体との交流。

・ 千潟の造成と改善作業を進行している。(三ヶ所とベンチの所 二ヶ所)

・ 新聞、テレビ、雑誌など、マスコミへの働きかけ。

・ 「谷津千潟の生物標本」の作成。

・ あらゆる人に対する「現地案内」など。

・ 「昔の千潟の絵」を販売。

・ 「谷津千潟自然教育園の絵」を販売。

・ 日曜日・休日には千潟に集って、あらゆる「ボランティア活動」を展開。

・ 淡水池の作成。

・ 各種看板の手入れ。

・ 埋め立て地や千潟の鳥を中心とする生物の保護と監視。特に繁殖期は強力に。

・ 各種ポスターの掲示

・ その他、「いろんなこと」。

・ スライド大会。 ・ 人間諸機能における、自然環境及び情操の影響。 ・ いわゆる、「能力」なるもの。

ふかんど

※146号

1982.1.30

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二丁目三五番六
電話 0476-1-1666
文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
1980.6.3

自然を大切に干潟の生き物

真間小学校 六年 吉田 千祥子

私は、マンションに住んでいるので動物が思うようにかえませんが、今まで何度か小鳥を飼いましたが、ひなだったせいか弱って死んでしまいました。泣きながら庭にお墓を作り、毎朝とりのえさと水をそなえました。

すると、そのえさをすずめやはとが食べにくるようになりました。私はお父さんと、えさ台を作り、庭に立てました。毎日、部屋の中から観察していると、ホオジロやムクドリ、オナガドリもくるようになりました。

そんなある日、新聞に「野鳥の楽園・谷津干潟」という見出しがありました。

私は、さっそくお母さんと車で出かけました。そこは、高速道路と大団地に囲まれた小さな干潟でした。そこに何千羽というたくさんの鳥たちが羽を休めています。小屋があり、野鳥の名前、絵などが書かれたかんばんも立てられています。オベラグラスで見ながら調べてみると、チドリ、シギ、カモメ、サギなどがいました。

私が観察しているところに、野鳥の愛護活動をしている森田三郎さんが、ぐうぜん来ていました。私は、森田さんの持っていた望遠鏡をかりて、鳥の名前や特徴を教えてもらいました。シャベルのような長いくちばしのダイシャクシギ、スズメのようなチドリ……

三時ごろ、潮がみちはじめ、水路のほうから魚やクラゲなどがたくさん流されてきました。ここは、カニやゴカイなどの食料が豊富なので、ここへ夏渡ってくるガリガリの鳥が秋にはぶっくりと太って他の国へ渡ってゆくそうです。それからは、たびたび、干潟に行きました。そのことで、干潟の生き物に興味をもった私は、「干潟の生き物」という本を買ってきました。この本には、干潟の生き方から、カニ、野鳥の種類まで書いてありました。自分で見た

ものの名前がわかると、とてもうれしくなりました。この本に書いてあるように、動物の世界では、きちんとした関係があります。おたがい食べたり食べられたりしながら、うまく具合につり合いをたもっています。しかし、人間は、そのつり合いを破ってしまいます。ヘドロがたまったり、うめたてられたりして、干潟も数少なくなっていました。これは国語で学習した「自然を守る」と同じであることに気づきました。

谷津干潟の鳥たちも、すみかを追われて、仕方なく小さな干潟に集まったのでしょう。干潟というものが、生物にとって、どんなに大切な環境なのか、よく分かりました。

その干潟を守っている人たちがいます。ヘドロを取ったり、ゴミを拾ったりして、野鳥の楽園にしているのです。私も干潟に興味をもつだけでなく、大きくなったら、森田さんのように鳥類愛護活動をやってみたいと思います。

そして数少なくなった日本の干潟をこの手で守って行きたいと思います。それには、汚染やうめたてのない自然の海をたもつことが、一番大切なことだと思います。

〔干潟の生きもの・林まきよし・らくだ出版〕

〔評〕
干潟に出かけて行き、小鳥たちの様子を観察して、疑問に思ったことを読書によって解決しようとする態度は立派です。また森田さんに感動し、あなたも自然を守ろうと決心したことは、すばらしいです。

右の如きものは、みじめな程に、心細り

限り力で、自然を残したいと何くもとなく

やってゐる人向ならば、最もよろこばしい

ことではなうらさうか。私と、その中の一

人である。

ましてやそれが、世代を違えた人間に、

「自らを守りたい」と想ったこと、一人

でどいてくれたということは、私産のしつ

きたことがあなから、無駄ではなかつたと思ひせる。

今、私産は、この子が出来なうことさや

つてゐる。しかし、将来、この子と同世代

の者は、私産が出来なかつたことが出来得

るのである。ところで、千祥子さんに、「

私が大きくなるまで、それまで森田さん産

ガンバッテて下さうし、そう言われたら何

としよう。

この感想文は、学校代表、市優秀になりました。

砂地に千ドリの足アトが

どうして今頃に...

知らぬは地元なり



野鳥観察者くり出す
 谷津干潟
 渡り鳥の楽園として知られる香
 志野市の谷津干潟には今、シギや
 チドリなど約二十種類の野鳥が飛
 来し、冬の日常に映える水面で
 のんびりと羽を休めている。
 谷津干潟は現在、木曾川河口、
 有明海と並んで日本の三大干潟と
 言われ、世界的には日本一。今年
 は、同干潟では珍しいトモエガ
 モ、アメリカヒドリガモなども観
 察され、魚介類やゴカイなど豊富
 なエサをあさっている。
 谷津干潟を愛する人は多く、日
 本野鳥の会、谷津干潟を守る
 会のほか、一般観察者を含め、
 週末には望遠鏡を持った野鳥フ



ンがくり出している。
 習志野市本大久保在住、学生
 桑原和之さん(左)は「生まれが金
 沢だったもので、干潟に集まる野
 鳥を見て感動したと、連日観察
 を続けている。

1982.1.26
 毎日新聞

干潟で羽を休めるカモとエサをあさるコサギ

もちろん「クワガタ
 」です。これ、ちゃん
 と生きております。

「フローネの小屋」
 のそばにいました。風
 よけの為の、土手の斜
 面にです。でど、気温
 が低いので、動作はり
 っくりでした。まわり
 の古い木から出て来た
 のかな。

これと又、「フロー
 ネの小屋」のすぐそば
 です。堤防のかけなの
 で風が当たらない為、
 こうしてそっくり残っ
 ているのです。

サラ／＼とした砂の
 所です。このほか、カ
 モ、サギのそありまし
 た。

谷津干潟が、「日本の三大干潟」の一
 つとは恐れ入ります。初耳です。
 その当否はとどかく、「当りずと言え
 ざど遠からず」、ということとは固達いな
 く言えるでしょう。皆さん、それが、現
 実の姿、日本全国に残っている干潟の奥
 情なのです。地元野鳥の会の皆さん、干
 潟と生き物の立場に、どうか帰って下さい。
 彼らには関係なりのですから。

西水路の海への出口。三月に
 完成します。左が一時的な水路。



何かがありましたら、当会まで相談、連絡して下さい。

ふかんど

オ147号

1982.2.1

谷津干潟愛護研究会
 谷津市本北方二丁目三五ノ六
 千272 電話 〇三三〇一三三
 文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
 1980.6.3

軽油流し「一か月も

嘆きの谷津干潟愛護研

習志野市谷津に野鳥の楽園とし「谷津干潟愛護研究会」の森田三郎さん等を嘆かせている。油が残り続けている「谷津干潟」と東 京湾を結ぶ同市西堤の東二丁目水路、水面に広がるのを見ながら、森田さんに、約一か月前から、少量ながら、毎日約一トンに軽油が雨水管から流れて、干潟を毎日汚染している。生き返りつつある干潟や東京湾を突進させる。油の流出を知った市公害センターの真船洋所長は「少量であっても、油は流してはならない。水質汚濁防止法や関係例にはからない少量であっても、原因がはっきりすれば、指導して改善させるとして、早急にたれ流し先を突き止める。



堤防の上から。右の白りのが土管。石の下の黒いのはフジツボ。

1/月30日(土)。市の公害センターの職員である。現在、油の出所を調査しているとのこと。



一月十二日に、臨海整備協会を通じ、企業庁に通知しました。が、その後出ていたので、私は行動に踏み切ったのです。この辺一帯は、工場のゴミが散らかし放題。要注意。

正直言って、こういう「油のたれ流し」などのことで、会報のスペースを割きたくない。扱うのそ気が進まないし、私のみならず、関係者だってイヤだろう。確認してかり、一ヶ月もたっただけで、このは、更にはそういうことだったのである。毎日見に行っ、止まってるの、放ってとあけなりの思い、そしてのり出したのである。初めは、一時的なもの、不注意によるものだと思っていた。又、そうあって欲しいと願っていたのだ。

しかし、干潟や埋め立て地に来て、こういうことをやる人が、殆んどいないのである。私と過去に(他のところでも)、何回も渡り鳥の卵のことで提案して来たが、「いいいですね」で終り。一回をな。ところが、ぶつかるのはバードウォッチャーとだ。そして組織とだ。ホントに大変なんです。話しは変わりますが、ひと口に干潟の清掃と云って、更にいろいろなことかかります。生物の生態、干潟の地質や潮水の具合、水辺の草や流木の効用など。目、鼻、感覚で。

ふかんど

第148号

1982.2.2

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五六
電話 0476-1-6668
文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
1980.6.3

やはり、家族連れが多い

一月三十一日(日)。午後一時〜三時まで。場所は勿論、「フローネの小屋」。

長塚氏が主に、観察、説明にあたっていた。望遠鏡が二台では、家族連れの方が多いので、やはり少ない。ズラリと、五台ぐらひは最底欲しい。一時に二人しかのぞくことが出来ないので、他の人は、「早く代ってえ」なんて言っていた。時々、「谷津干潟が近くにあつて、鳥がいっぱいいるって聞いて、双眼鏡を買

いましたよーいし、という人もいます。しかし、干潟の鳥はかなり遠いので、肉眼では勿論、双眼鏡でもせいぜい七〜八倍、ちょっと見づらい。それに、持つ手をふるえる。

そこへいくと、二十五倍の望遠鏡は、比較にならぬほどの「迫力」がある。固定してあるのでブレないし、見ていて楽なのである。

「わあー、よく見えますう。こんなにいっぱいいるのか、わあ食べてる食べてる」。こういうのが、初めてのぞいた人の大方の言葉なのである。まだ一ヶ所で本格的ではないが、着々と用意は出来つつあると聞いています。

いつもの如く、三丁目前の干潟に行ったら、煙がモク／＼のぼっていた。「あれ、誰かがゴミを燃してんのかなあ、困ったなあ」と思って、堤防の上にかけて上った。乞食だった。たき火の木の組み

合わせ方は、見て、「うまい、しと思った。着がえていた私に、「何すんだい？」と。「そういだ、この見」。すると、「うーん、じゃあ散らかしちゃあいけぬえんだなあ」と言った。「うんまあ、し」と、火にあたった。



スコップと一輪車が道具。いろいろな形の干潟を作っている。毎日少しずつ。

火を使い、なべ、ちゃん、はしでの料理中。手つきは奥になれている。



冷たい北風が吹いていました



干潟のそばで、津田沼高校の生徒がマラソンをしていました。幸い、この道は車が少ないのです。

雪ではありません、氷なのです。ものすごく風の冷たい、寒い日でした。このようなことは、ごくめずらしいのです。



風さえなければ、ほんとにいい日なんです。車の中にいると、ホカホカしてとってどい気持ちです。座って目をつぶり、いっとしてると、時間が、私の体のそばぞ、スーッと流れて行き、その音が聞こえるようです。

そんな時、ずっと昔のことがつり最近の如く、そして、つい最近のことか、ずっと離れた遠いことか、そんな感じになります。

試しのベンチを三つ
ペンキは塗らないうちにしました。
流木、丸出しのまんま。木地そのままです。いかがでしょうか？
なるべく自然のものがいい、という
会員の声とされることながら、近く
の田地の人産からも聞いていました。
今、壊れた代りに作っております。



主導権争いといいいけど、干潟の生きものは、主義・主張や、意見や、方針や考え方をエサとして食べるゆんだよなあ。

ふかんど

第149号

1982.2.5

谷津干潟愛護研究会
市川市本北方二丁目三五〇番地
〒272 電話 0476-31-1666
文責 森田三郎

会費 年2000

創刊 1980.6.3

野鳥の楽園

谷津干潟に軽油

油膜に愛護研ハラハラ



野鳥の楽園で知られる習志野市の谷津干潟と東京湾を結ぶ水路に、一月以上前から軽油が流れ込み、保護運動を続けている谷津干潟愛護研究会(森田三郎会長)では「このままでは干潟の生物に影響が出かねない」と心配している。軽油が流れ込んでいるのは、同市西浜(あかねはま)の東号水路にある土管からで、あたりの水面には薄い油膜ができている。量はそれほど多くはないが、満ち潮の時、干潟にも広がり、翼を休めている鳥たちにも流れ込んだ軽油を調べる市公害センターの職員

習志野市西浜で

朝日新聞
1982.2.5

一部に油が付着している。森田会長によると流入が自立ち始めたのは昨年十二月下旬からで、日によって量が増えるという。この事態を重視した同市公害センター(真船洋所長)は、先月末から汚染源の調査に乗り出した。土管をたどって各マンホールを調べたところ、水路から約三百メートル離れたガソリンスタンドの油水分離装置が故障しているのを突き止めた。このため同センターでは、「洗車などで流れ出した軽油がそのまま排水路に流れ込んだ」との見方を強め、四日に同スタンドの責任者の出頭を求め事情を聴くことにしている。

皆さん、これ外れと、こういうことは有るのでしょか。皆さんだって、私だって、「ナイコト」を願っていますよ。と、頭のいい、うまい方法は無いでしょうか。こんなことをやって外れ、そのうち、私はこの辺の経営者から、オニ、子扱い、さへするだろう。あああーいやだなあ。

「あ、あの車だ、あの人間だ」

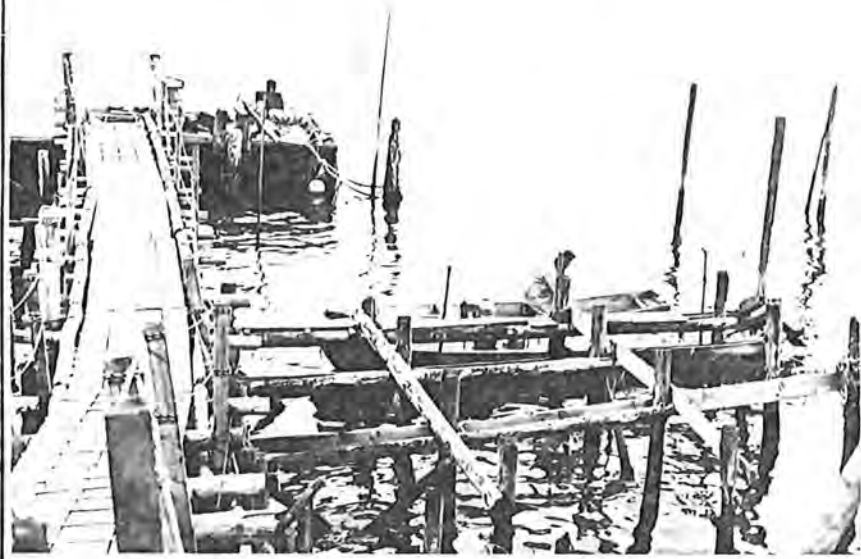
先の読売新聞に続き、又今回の朝日新聞。右の記事が出た日のことである。件のガソリンスタンドの所を、私はいつもの如く車で通った。そのスタンドは角にあつて、店の正面と横の通りは私にとって、メインストリートなのである。

「動く生物図鑑」といふべき、干潟のチンドン屋みたいな私の軽自動車が、店の正面から横の通りを走っていった。すると、スタンドのドアがパツと開いて、一人の従業員がすつと出て来た。片手でドアを開けたままにおさえ、片手で私の車の外をゆが差しながら口を動かしているのだ。すぐにまた二人の従業員が出て来て、皆んなし

てこっちを見ていたのであった。

たとえば、彼らの声は聞かぬとと、その言つたところぐらいは、誰だっておおよその見当はつくだろう。「あれだ、あの車に乗つて人間だ、油のことで、オレ達の店のことを新聞に出したのは、あの男、油のタレ流しだなんてタレ込みやかつてえ、面白くねえ野郎だあ」と。当然さと言えど、遠からずだろう。たとえば、その当りだったとして、彼らの側に立てば、そう思つても無理からぬことである。いわゆる、「手の汚れることをする」というのは、こんなことを言うのであろう。ゴミの時をそうだった。どしかしたら、地域活動といつものは、市街戦、白兵戦に似ている所があるのかと知れない。敵味方が、前後左右に、同じ所に入り乱れているから。

「ふかんど時代」をたずねて



海老川の河口にある。「ララポート」のすぐ隣にある。堤防が高く、道路から見えない。

NHKに感謝します

私が話したことは、全部出たと思っ
ている。聞いてみて、よくぞカットしなかつ
たなあ、というのが正直な奥意である。

二月一日(月)、午後六時から「夕凧のひ
ととき」という、FMラジオの放送である
。十五分間。長いと思った。とくに後半、
習志野市のことについては、少々きついこ
とを言ったと思う。が、それは、批判や単
なる意見ではない。事実である。湯中にあ
って、自ら身をこめて体験し、誰よりも知
っているからだ。しかも、見たり聞いてい
た人面ではなかった。

埋め立て地のこと、コアジサシやセイタ
カシギを始めとする渡り鳥のこと、クリー
ン作戦におけるゴミとその対策、水路や下
水のこと、谷津干潟に来る人産にしてきた
ことなど……。とうとう十分とはいえな

なからと、力及ばずともやり抜き、今なお
やり続けている。

谷津干潟に関係する、いくつもの団体の
中で、私産がいちばん小さい。残念だが、事
実なのである。だから、力もいちばん小さ
い。やれること、やりたいことばかりやっ
ているせいか、今だかつて、会員募集など
したことはなかった。うっかりしていたの
だ、気がまわらなかつたのだらう。

思い返すと、ひや汗が出てくる。会長だ
なんていう意識はまるでない。会費を払っ
てくれている会員という方々に、いつとす
まなれと思っっている。何と、それらの方々
にすることが出来ないからだ。誰か代って
くれないか？

知ったる限り、全国的に見ても、この少
人数のボランティア活動は、ズバ抜けてい
ると思う。その一部をそのまま出してくれ
たNHKさん、どうもありがとうございます。

昔、といつても、今の湾岸道路の下から
先が海だった頃、ここから遊ラン船が発着
していた。船の名前は「海ゾク船」といっ
た。「ヘルスセンター」が全盛期の頃だっ
た。

船の作りは、いかにも本当の「海ゾク船
」のように作ってあった。船橋港をひと回
りして来たのだった。現在の、キーコーヒ
ーという会社ぐらいの所にブイがあつて、
そこを砲回した。私が乗ってから、とう二
十年も過つてしまった。

ふかんど

第150号

1982.2.6

谷津千潟愛護研究会
〒292 市川市本北方二丁目三五〇六
電話 〇五三二一六六六八
文責 木村 田三郎

会費 年2000

創刊
1980.6.3



袖ヶ浦西小学校の北側に隣接している。すぐ向う側は、千葉街道。右の小さいのは便所。

忘れられたような所とは、まさに、こういう所を言うのかも知れない。

古老に聞くと、その昔、海で使う道具を入れておいたり、いろんな作業などをする所だったのこと。ここは、この一郭だけ、海にちよっと出っばっていたので、テバナ（出鼻）、あるいはテバナへ出棚と呼ばれるていた。どちうだったか、そうはっきり憶えていない。

南向きで、まわりには草はらがあり、日がよく当るのでとって暖かそうである。で、私は、この草はらで遊んでいる子供を、ただの一度すら見たことがない。私などは通るたびに、「この草はらで寝っころがったり、いい気持ちだろうなあー、ー」とか、「草はらの中で、走ってきて、デングリ返し、やってみたいなあ」、あるいは、「あすこのポカく、日が当たるところで、日なたぽっこしていたいなあ」と、そんなことを思ってしまうのである。子供のくせに、それをやらぬなんていうのはモッタイナイと思う。殆んど修理していない。せめて、壊される前に、このささやかな「ふかんど」にのせておこうと思ったのである。

せてしま入っていうような具合ですが。

森田個人の、好みからの発想なんです。

だから、「つまらない」、「自然保護」ちゆのとはカンケイナイ」という声が多ければ、やめますんで、皆さんの声を、お願い、聞かせてくれないでしょうか。

どうでしょうか、

「ふかんど時代」をたずねて

別に、何を、と言ったって、コレと言っ

て特別にあるものに限るわけじゃありません。で、要するに、手当り次第、何でもの

私達は、親の前でと注意します

たとえば、ゴミを捨てたり、鳥や意してくひたらちばんいい。カ、そういっ

魚ヤカニに商つてものを投げたり、親ばかりではない。

ビンや割ってたり、すかさず、注意するような行為をやっている子供は、

その場で注意してやめさせています。とフリップに、「話しかかると年令である。

その他、火あそび、どう見ても危険な、だから、その行為をしていっている子供へ人面

行為、テーブルやベンチ、ポストや看板、自身にハッキリ言うことが、大げさに言えば

ヤ小屋などをこわしていたり、その時、社会的・人間的に、そして責任感などという

場でビシク言うっているのです。親定かだと、とっとと正しい、あるいは適切

勿論、私達には何の権限となりし、特、なのではないだろうか。「親が本来はやるべ

りどのようのといつ人面ではない。言、きなのに、ー、ということができ。それ

うまでとなく、そこに親ごさんかいたら、とそうだ。が、普通の親だったら、自分の子

、その才が自分で自分の子供にひと言注、供が注意されれば、言わずともわかっている

と信じている。幸い、今までに、親ごさんと、口論になったような

、それは一度とない。ことは一度とない。

時には、ドスを、り上げて、怒鳴るこ

ととある。ビンをた、たきつけて割つてい

たり、水路の魚に石、ヤビンや投げたり、

小屋やぶをこわして、り時などだ。「コノ

ヤロオオー、テ、メディアラー、ナニ

マッテンダア、ノ、吠え了れ、

かみつく如く、

そして、身ぶり大き

く、オウパシッテ、

ゆくのである。

文化

一月二十日(読者新聞)

て、目れが太ると、親木を枯らし、わらわっている父の顔がうかんだ。...

滅びる照葉樹林



水上方 勉 社蔵さも 妖しさも消え

子供は、伐られた家の、あへんいた。まるい窓のそばに、わきの根や隙の梢(すずえ)に生気が...

その祖父のつけ売りだといは、広場にのびた小枝が、村じゅうの。...

(作家)

ふがんど

第151号

1982.2.7

谷津干潟愛護研究会
 〒272 市川市本北方二丁目三五番六
 電話 0476-1-1666八
 文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
 1980.6.3

ホタルを呼ぶ子供たち

「ほーほー、ホタルこい、こっちのみりずはあまみりぞあ、あっちのみりずはがあらいぞあー、ほーほーホタルこいし。」
 「いんどあー、おあー、えっぺえ飛んでんどあー、すげええやあーし。」
 「見てみりん、ホタルばっけだあ、えっぺだあええ(たくさん)っけだあ、えっぺだあええ、ぺいんなあー、来いよあ、とってからけんべえよあ、みんなあこいよあーし。」

皆さん、谷津干潟のすぐそばで、かつて、こんな子供の声か、ホタルを呼ぶ声や唄が聞こえた頃があったのです。

それはもう、今から二十五年以上と昔のことでした。

「いろは溜めしなんて呼ばれていた、たくさんのお池がありました。まわりには草がまえ、木も立っていました。谷津五丁目の方には「しほり水」といって、水がチヨロ／＼出ていたし、小川や野原の所どころには「湧き水」もありました。

田んぼや野原の向を、くね／＼と流れてきた小川には、水車が回っていてブツ



クレかけた小屋の中で粉をすりいていた。そしてまた、水が溜っている池の土手には、田んぼに水をくむための風車が何台もありました。昼間、ぼくがもういっす所を歩くと

カエルが「キュッ、キュッ」と鳴り、次々と岸辺から水の中へ「チャポ」と音をたててとび込んでいくのでした。

浮いた木や水草の上では、カメが昼寝をしていたり、トンボがとまって休んでいました。草むらの中からそっと水の中を見よと、大小のメダカの群が泳ぐ「メダカの学校」もありました。

でど、夜はちがいます。

その同じ所には、今度はホタルたちがたくさん飛びようになるのです。ホタルは、水辺が大好きでした。夏の夜空の星とはうがうかうに光っていました。小さく静かに、不思議に、そしてその光りを「ジー」と見つめていると、何だか、吸り込まれるように感じになってしまふのでした。ぼくたちが昼間遊んだ所に、こんなにいっぱいのホタルがいるなんて、うれしさと不思議さの、子供心でした。

一日中、冷たりに風が吹きっぱなしであった。立っているだけでどつらい。それでど、けっこう人は干潟に来るものだ。寒いのが、次のこととした。

- 一、望遠鏡を三台設置して、来た方々に使ってもらった。
- 二、ベンチの修理(ニッパ)と作成(ニッパ)。
- 三、干潟のゴミを、十一袋ひろった。
- 四、ドラム缶を使用して、燃えるゴミは燃やした。カスヤ灰は、後で袋に入れた。

五、干潟の改善作業。

以上です。とにかく、一年中断え間なく、いろんなことをやっています。寒い日であったら、当たり前。清掃は、「フローネの小屋」から東がの二百メートルぐらいの中の所。日当りは堤防の下なので悪く、吹きさらし。干潟の砂が、カチカチに氷っているんです。勿論、潮溜まりの水も氷です。そんな所のゴミは、足でくづして氷を割り、手をフッ、込んでゴミを水の中から拾った。ベンチの為の流れ木も、ロープで引き上げました。ゴム手袋の手や、足が動いていないとかじかんでしまう。

京葉ホンダ社長、小林大光氏は、私にとって、何かと教えられたところのある方である。「森田さん、いりかり、今度自分股东会人向をさ、よよく見てごらん。ジーンと冷静に、その人を観察してみな〜。その人が言っていることや、やっていることさ、よよく考えなが見つけてみなよ」と。

。まあするとゆえ、本当に、そのごころについている人向が、いかに少ないかということかわかるよ」。お茶を飲みながらセンベイを喰った私に、氏は、人差し指をこっに向け「言っている。」「ふううん〜」と私。小林大光氏は、私より十才年上である。中学を卒業してからは、定時制高校を始めとして、以後すべて今日まで、自力で来た人向である。氏も、「〇〇の師」なんて

今日の話題

年末とは、歌謡曲のシーズンである。レコード大賞、紅白歌合戦という頂点をめじて、歌が絶えず、音楽界ではまた歌がはやる。そこでその歌が、それを聞いても、どいかに変わらぬ。おぼえがしない。なぜか。

ワンパター

「ワンパター」は、大賞を奪った、司会役がマイクを向ける。今の抱負は、この喜びを先ず、だれに伝えたいですか。歌手へ。司会役は、何をかぶせか。一ちように抱負が司会役には「わたし」。「母の姿、歌手はまた泣く。司会役は、泣かせる。

言ったなら、テレだろう。私をテレる。上の記事は、オイル交換に行った時、話の最中に氏かとり出てきたものである。その時、「民主的な社会、っていうのはさ、いろんな価値を持った人達がいって認め合う、つまりバランスがとれた、ゆづなさんさ」と言っていた。

ふかんど

第152号

1982.2.8

谷津千鴻愛護研究会
〒272 市川市本北方二ノ三五ノ六
電話(四三)一六六六八
文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
1980.6.3

どうしてこんなに「ジャンク」に出
るんだろう。

初めは、「出してる」って感じだった
けど、今はどう、「出ちゃう」って感じ
。「何なく」出来あがってしまうのです
。「ピョコ、ピョコ」って具合にです。

ある方から、「ふかんど」は森田さん
の、自費出版みたいなんじゃないよ、と言
われました。又、この方、「日刊・ふか
んど」なんて言ったことあります。入
浜権運動をしていっしょやる、兵庫県・
高砂市の高崎裕士さんは、「マシガン
ふかんど」と紙で書いてよこしまし
た。

「ふかんど」は、ある新聞記者が考え
てくれたものです。名前を作ることで
す。ところがこの人、作り始めて間とな
い頃、こんなことを言い出すのです。
「まあ、そうだねえ、二ノ三号、せりせ
り五ノ六号だねえ、そんなくらいすんとお
、書くことなくなっちゃうだろうし、
息を切れちゃうんじゃないかと思ってゆ
えー、まあ森田さんよあ、とにかく
やってみなよ。んでさあ、十号になっ
たら、新しいシニコシ紙として、新聞で扱
ってやるよ」と。私は、「へえー、そう
、そうなるっちゃうのかねえ、んでさ、そ
れでいいやあー」と思っていました。

た。

確か、一号か二号を作った時である。ブ
ザマ、としか言ひようのない「ふかんど」を
強く支持し、是非続行するように、具体
的ビジョンのいくつを子えてくれた人がいた
。NHKの、春見書紀氏である。氏は番組
で、過去六回の付き合ひがあった。氏は、千
鴻と、特に埋め立て地での番組を六本作って
いた。報道関係者において、私の知る限り、
この人ほど粘りゆく埋め立て地を知り、かつ
関心を持っていてる人を他に知らない。

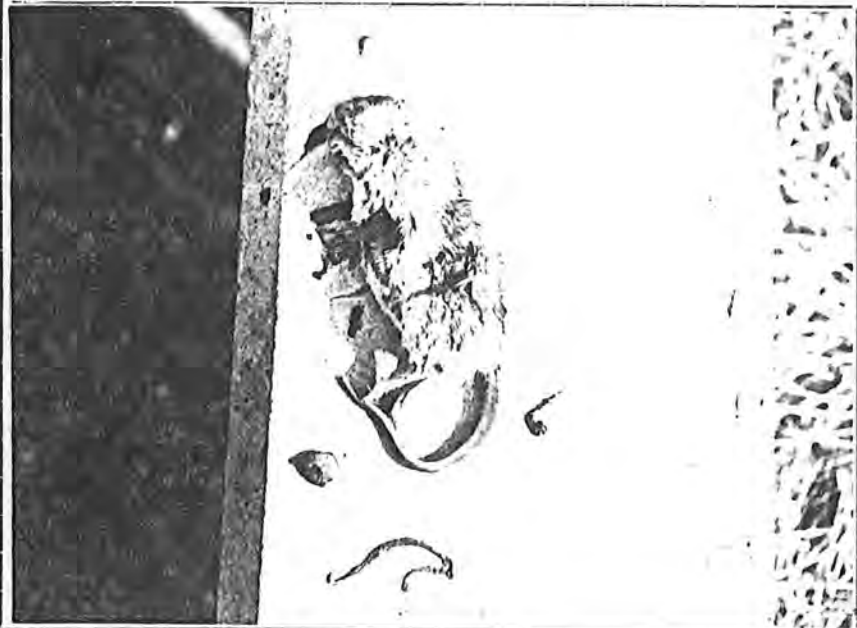
氏は言う、「ふかんど」遂行の、使命を
。「……森田さん、会報と言ったからとて
なにとことさら改まることはありません。
あなたが、今までやって来たこと、今やって
いることを、そのままやっていけばいいので
す。そして、千鴻でのこと、埋め立て地での
ことを、その時々、折りに触れて記録してい
けば、それでもいいのです。どんな小さなもの
でもいい、それと、五号、十号と続けてゆく
のです。千鴻とは、埋め立てとは、「一体何
だったのか?」、何を失い、何を得たのか?
そこが、どんなだったのか、どんなことがあ
ったのか、そこが、どんなふうに変ってゆき
、どのようになっかっていったのか……。森田
さん、後々の為に、確と見つめていって下さ
い。森田さんのほか、誰が出来たのでしょうか
。苦しくとも、どうあつても、あせらずに、
どうか続けていって下さい」と。

すぐそばに、とってと大きなマンションがあるのです。昨年来たばかりです。テーブルとベンチでは、プラモデルを作っている。おやつを用意してある。気持ちが良いので、ここで作るのだと言っていました。



通信箱とベンチと子供達

体に穴が空いている。クチバシのアトかと思えます。腹ワタが少し、散らかっていました。コミミズクかとも知れませんが、食べている所へ何ものかが来たので、そのままに置いていったのでしよう。



ミズネの上の堤

五十嵐吉夫氏が、コミミズクの撮影に執念を燃やしています。

夕方の明かるいうちに、コミミズクの来るような所、クイの所にカメラをセットするのです。クイの上に、何物かがとまったり、自動的にシヤッターが切れるようにしてある。勿論、フラッシュもたかへる。

二月七日(日)、午後四時頃埋め立て地に来ました。そして、前さって目星をつけておいた草むらの中、クイにゆらゆらつけたのである。日かとおぼりと暮れから、しばらく様子を見ていたのだろう。それから五十嵐氏は、よく行く茶店にコーヒーを飲み

に行った。カメラなどはそこに置きっ放しにして。体が冷えるのである。

茶店で、氏とバッタリ会った。私とここで、ゆったりした気分でした。寒い干潟で作業した後、銭湯へ入り、ご飯を食べたり、体がとろけるようだった。

「いっしょに行ってみよう」と誘われ、たのは、話しをしてから一時向くらだった。冷えびえとして、光々たる月明かりの埋め立て地。砂地と草むらの中を、二人でカメラの所まで歩いて行った。七年前、ここに大きなコアジサシのコロニーがあった。今は鉄糸網。残念、カメラは今日と空振りだった。

ふかんど

号153

1982.2.9

谷津千潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二丁目三五ノ六
電話0476-1166六八
文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
1980.6.3

一つ積んでは父の為
二つ積んでは母の為

賽の河原にすむ鬼も
崩すはゆるべの石な木ぞ
積みゆく心は崩されど

ハクリーン作戦随感

右の句、寒風の千潟でただ一人、ゴミ
を捨りながら作ったもの。だから、作り
方はでたらめである。

どだい、「思い」なんてもんは、たと
えば、植え込みの木にやって来た、小鳥
の如きものである。とにどかくにも、そ
の時にパッと、急いで何かでつかまえて
おかないと、フギの瞬間、どっかへ飛ん
で行ってしまうのだ。「そのうち」、「
あとで」なんて思ってたら、さっ、さっ
きのことは何だったっけ、ってな調子に
なるのだ。覚えのある方と、ヤミかしく
いと思うがー。

今、谷津三丁目前で、毎日、千潟の
改善と造作作業に励んでいる。中央に、
「谷津千潟クリーン作戦モデル地区」と
書かれた、白くて太い流木の標識が立っ
ている。敷しくかつ、根気強い日々の作
業である。一日に大した量が出来たもの
ではない。しかし、一週単位で見ると

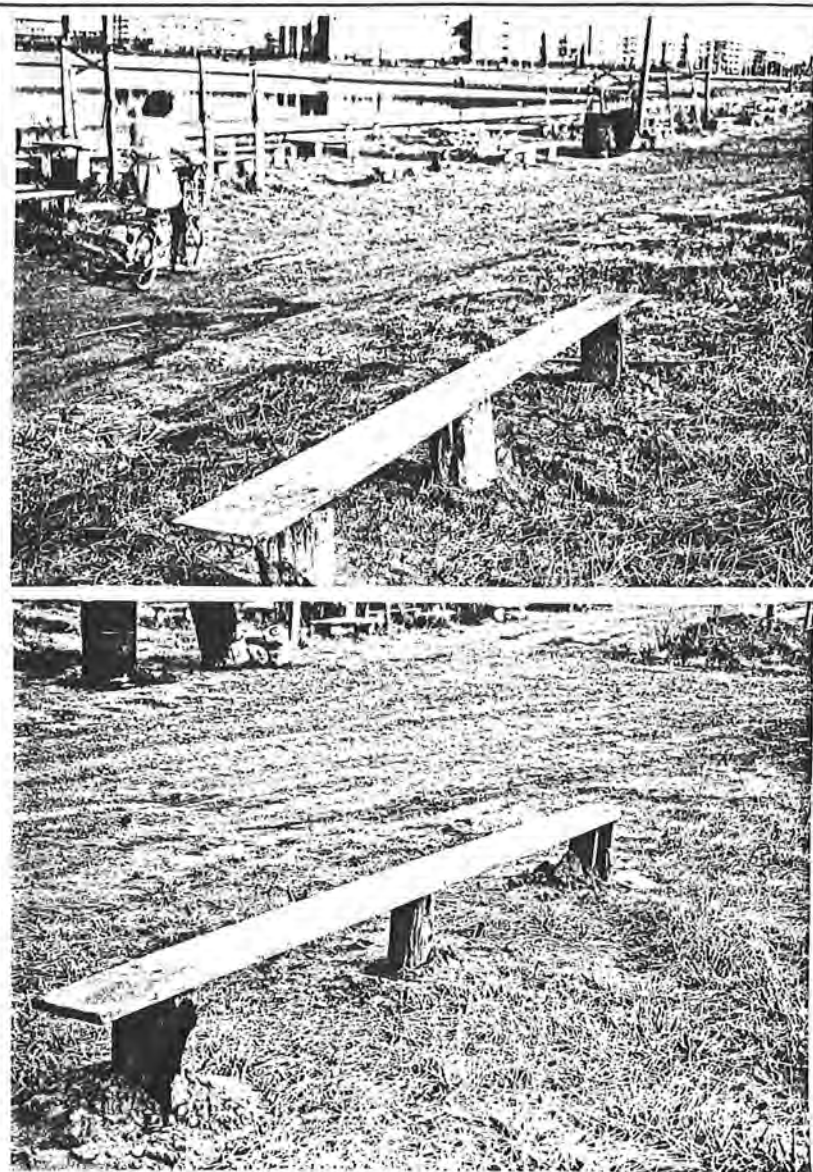
、その変わりゆくサマが、遠くがハッキリとわ
かる。

土の中から、まだかなりの量の、ガラス、
鉄クズ、ビシ、カン、カワラ、コンクリート
、石コロ、その他のゴミの類が出てくる。グ
サツとさし込ませコップに、カチツと音をた
てて当てるからすぐわかる。作業はゆるさをひ
ろいながやっていく。私一人で、一日、土
ノウ袋に二〜四つづめこんでいる。

丘々に住む主婦の人達が、月に一度清掃し
てくゆる。それかど小程助かるか、来て、や
ってみなければ、とうていわかるものではな
い。今までに、千潟に関係する自然保護団体
がいくつか、「我々をやりましよう」と言っ
て来た。ごん程のことをやったらどうか。やり
はしない。今とである。ここに、やはり事実
として記しておきたい。「地域活動」をモチ
トーとしていこうという会員五百名程の団体が
一つではない、たった一人の主婦にもは
るかに及ばないのである。主婦と私がクリー
ン作戦を展開した時、最初に危険視、無視し
、批判したのは残念ながら、地元の団体であ
った。

一ヶ月に、ゴミを入れた土ノウ袋を、十〜
三十出していく。ベンチのある方では二十〜
四十ぐらい。袋は一つ、三十五円する。千潟
全体のゴミは、ゆっくり、少しずつなくなっ
て来ります。どこかで、土ノウ袋を千ぐら
い、カボツてく小なりかなあー。

黙ってやるか、それと習志野市に責任をとってもらいましょうか。



谷津干潟クリーン作戦

ヤ47回（主婦）二月十六日（火）10:30～12:00

場所 谷津三丁目前の干潟

ヤ48回（一般）二月二十一日（日）1:00～3:30

場所 テーブルとベンチのある所

用意 ゴム手袋 長ぐつ

∴ ゴミを入れる袋は当方で用意

クリーン作戦の「本番」は、何と云ってと谷津三丁目の所です。テーブルとベンチの所は流れて来たものなので、小さくて軽いものが多いのですぐきれいになります。しかし、三丁目の方は、ガラス・石、鉄クズ・生活用品全般です。ベンチの方と比べて、何十倍の労力がかかります。勿論、習志野市民不法投棄したものです。やむを得ない時、市と対立することも辞さない考えです。（森田）

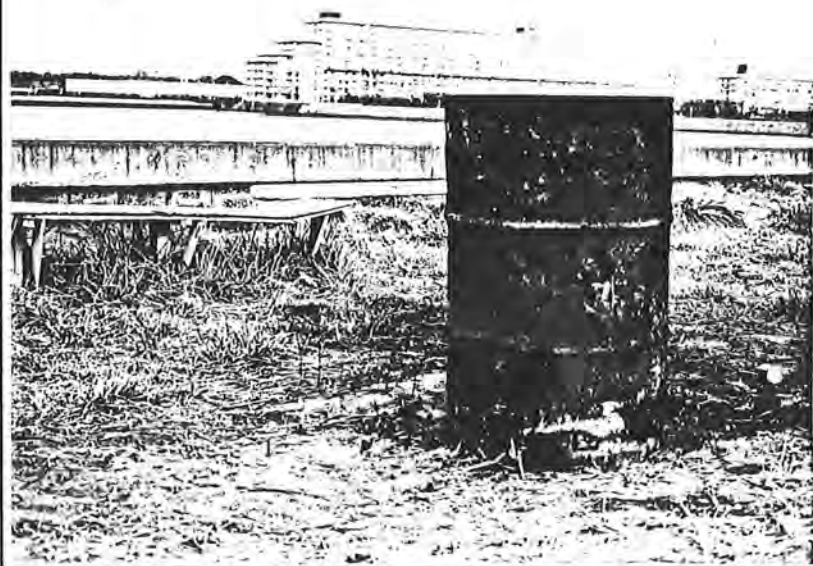
友の会のベンチ

新しいのき二つ作り
ました。

今、古くてこわれた
ものの代りに、少しず
つ作っていつておりま
す。ここでのいつき、望
遠鏡を一般公用してお
ります。

長塚氏が考案してくれました。その前にこう言っていたのです。「森田さん、私達が干潟のそうじで使う、ゴミ袋の数だけでも相とうななんだよ。何しろ、全盛で一年中やってるんだからゆえ、他の団体は何かを言うけど、ベンチを使ってもペンキヤクギ一本出さねえし、ゴミ袋を一つも出さねえ。少しでも燃やして節約しようよ」と。

焼却炉が出来ました



造成された、谷津遊園の驛車場に。

ふがんど

号154

1982.2.10

谷津干潟愛護研究会

〒272 市川市本北方二丁目三五〇六
電話 0476-1-6666
文責 森田三郎

会費年2000

創刊
1980.6.3

過去八年間、私産は、これと同じような光景を、いくつもの所で見て来ました。具体的に言います。

一、「ベンチの所や」「キーコーヒー」、「船橋卸団地」の所に水溜まりがたくさんあった頃。
二、「ホンダ」、「スバル」、「習志野市海浜公園の出来る前の所」。

三、葛張の埋め立て地が新しい頃。

四、津田沼高校のグラウンド。

五、子真の駐車場が出来る前の、アスファルトや砂利の駐車場。

六、干潟のそばの、宅地造成された所。

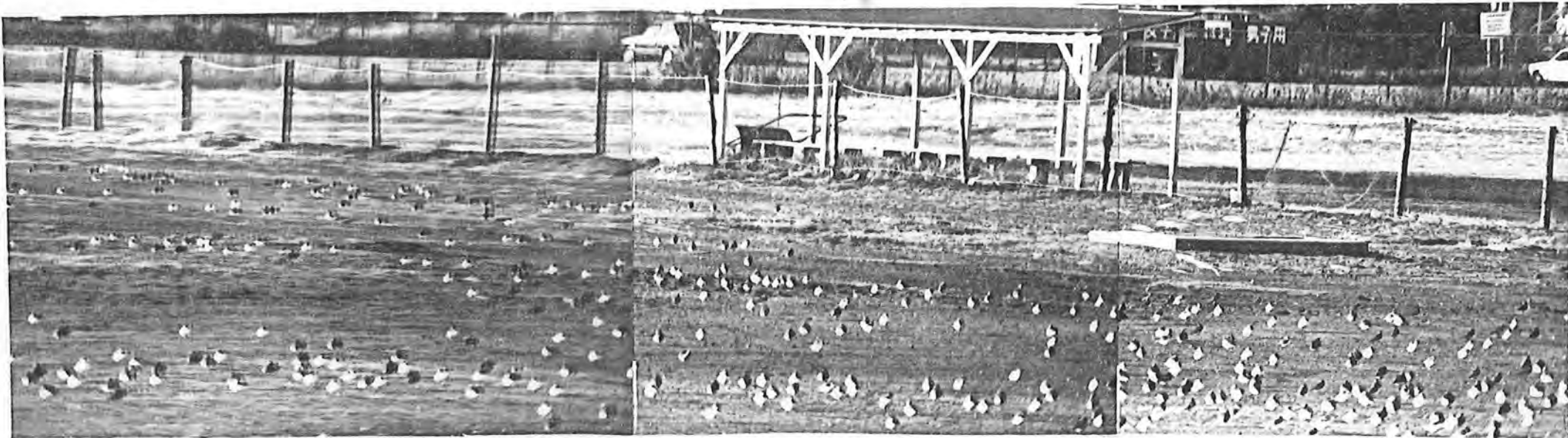
以上の所などに、干潟に潮が来て、又引けると、渡り鳥の群が出たり入ったり、往復していたのでした。

カモの群が、ヘリコプターの音におどろいて、干潟の方に飛んでいきます。向うは、ジェットコースターが走る。

シロチドリの大群です。ハマシギもかかります。その数、約二千羽ぐらいでしょうか。

驛車場に人影や車がない時、今頃はよくこういう光景が見られます。

別に、エサを食べる為にここに来ているのではありません。干潟に潮が来て、水没してしまっただからです。コンクリートの所にも来ます。



またあ、今度は菅原文太ですか---

追伸 - 先日テレビを見ていたら、不思議な感じがして、森田さん
はちょっと菅原文太に似ていませんか？ お嫌いですか？

寒いので、ほっかむり



この森田、そんなにコワイ、な
おかフスゴ味のある顔をしている
のでしょうか。
私の印象では、菅原文太という
と、着流し姿のさらしの中から、
にぶくたすドスをやあら引き抜き
、ニッと笑って相手をにらむ。次
の瞬間、ブスッ、グエエーッ
、ドバく、ブミューッ



冬の、母の畑です。
イチゴ畑です。私の母が、とても大事にし
て、かわりがあって作っています。
葉の緑と黒ずんで、ちぢこまっぺいかにも
寒そうですね。こうして春を待っているとのこと。

油のタレ流しの所では



二月六日。原因者のガソリンスタンド
の人産です。バケツで油とすくっている。
私は、彼らに近づいていった。双方が見
つめただけ。沈黙のままその場を去った。

（ひとくに文太が顔や体に真赤な返え
り血を浴びる音）。そして文太、ベッ
トリと血のりのついたドスを持って、
夜の闇に消えて行く。歌が流れる。
「...とまあ、彼にはわかるが、そ
ういう印象が強い。
...あ森田だって、お母さんや子供
たち、女子大生などとお話や観察して
いる時、そして、干潟での速い幼い頃
の想い出を画っている時は、きつとヤ
サしいなごやかな顔、心もそうなっ
ていよと思う。顔の筋肉もそう動いてい
るはず。でも、いいんです、気が
ついたら私は、いつか、「谷津干潟の
たらあ・ばんない」になっていました。

本紙に 知識、経験曲か大 沢田文夫氏からでした。

場所こそ違え、切実たるものがあります

ふかんど

第155号

1982.2.11

谷津千瀉愛護研究会
〒272 市川市北方二丁目三五番六
電話 0476-31-1666
文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
1980.6.3

松下竜一さんを中心とする人たちの会報

「草の根通信」をのせました。

のせることについては、正直言って、しばらく迷いました。殆どこの会員の力は、松下さんや「草の根通信」について、知らなかりと思っただけでした。

それを知りつつも、個人的判断ではありませんが、敢えて「ふかんど」にのせたのは、とにどかくにと、「身につまざる思い」だったからです。他人ごとのように思えない、というのが理由です。

あくだけの運動を、よくぞまあやってきたなあ、と、私は、思わずにはいけなない。私は、決して会報だけを讀んで

てるわけではありません。多少なりと、松下さんというお人や、会の方々の個人的事情、いわゆる「台所」を見て知っていたからです。

今から六年前、私は松下さんたちのグループに呼ばれました。九州の大分県、中津市であった。何と知らなかった私に、「幼い頃、谷津千瀉周りで遊んだ想い出を語って欲しい」とのことでした。その時から知り始めたのです。松下さんの家に泊まったのではあるが、そこで受けた印象は、「こういう人が、このような生活をしていて、何でもまた運動をやっているんだらう？」という、失礼だが心細さの感を禁じ得なかった。誰でぞ一見して

謹んで会の解散を報告いたします

永い間にわたって御支援、御協力をいただきました「豊前火力絶対阻止、環境権訴訟をすすめる会」を、一九八二年一月三十一日を以て解散することになりましたので、謹んで報告させていただきます。

いかにも唐突な報告で恐縮なのですが、実はこのことは昨年夏以来、内部討議を重ねてきた上での、苦渋に満ちた結論であります。解散理由を単的に述べますなら、もはや対豊前火力闘争が、実質的に終わったことを認めざるをえないからです。

勿論、建設差止め裁判は、なお最高裁に係属中でその結論は出ていないのですが、しかし、最高裁で法廷が開かれるわけではなく、いつか届く一方的な決定を待つだけのことであり、その決定も先の大坂空港裁判の門前払い判決から推して、一片の期待さえ抱くことはできません。つまり、裁判闘争は終わったと考えます。

私どもの意に反して豊前火力発電所が操業を開始して、すでに数年が経ちます。さいわいにも、同発電所による被害が顕在化しないままに、(勿論、海岸が喪われたことなどは取返しつかぬ被害なのですが)、

当会の反対運動は有効な手段を持ちえぬまま今日に至りました。こういう停滞状況を、もう一度活性化しないのかというのが、昨年夏からの討議であったわけですが、無念ながら否定的結論で終わりました。

思えば、当会が結成されたのは、一九七三年三月一五日であり、ほぼ九年が経過しています。当会結成前に一年間の反対運動前史があったことをかぞえますと、ちょうど十年の歳月が経過したことになります。一人一人が十年の疲れを抱えていることを否定しえません。

勿論、このまま活力を喪った形で会を続けていくことも不可能ではありません。持続することの大切さを、口にしてみましたが、やはり私どもは、ここはけじめをつけるべき時だと判断しました。それが、沢山の支援者、協力者への当会の責任だと思っております。

本日に当会は、その発足時から今日に至るまで、身に余るほどの熱い御支援をいただいたしてきました。実に九年間にわたって、毎月欠かさずカンパを送り続けて下さった方が沢山います。もはや有効な豊前火力闘争を組み合わせないし、これからは組みえないと

原告団他一同

次頁に続きます。

お振込は千葉銀行012-54253
谷津千瀉愛護研究会

むしろ新しい出発のために

松 下 竜 一

◇「さびしいなあ」

一月三十一日、右頁に掲げる公式声明を發して記者会見し、当会の解散を公表しました。

公式声明では表現できなかった内情をもう少し詳しく報告します。

解散を最初に提議したのは、私でした。昨年夏、耶馬溪で原告団中心の合宿をした夜のことです。

その時の結論は、まだ時期が適当でない、最高裁判決の出るまでは現状を維持すべきだということになりました。年末になって、再び解散の論議を持ち出した一つのきっかけとしては、声明にありますように、大阪空港裁判の最高裁判決がありました。

もはや当会の活動が停滞している以上、最高裁判決など待たずに解散すべきではないかという私の再度の提案に、もう反対者はいませんでした。原告団最年長の市崎由春さんが、しきりに「寂しいなあ」と連発して「なんとか続けられんもんかなあ」と嘆息しましたが、それは全員の内心の思いでもありました。

私は解散を提議する時に使った言葉は、「けじめをつけたい」ということでした。会としての活動力を喪った以上、そしてその蘇生が希めない以上、解散することが「けじめ」だという考えです。

豊前火力絶対阻止・環境権訴訟をすすめる会が、裁判闘争のために結成された機能してきた会であった以上、その裁判闘争の終りと共に役割を終えるのもやむをえません。その裁判闘争は、昨年三月三十一日の高裁判決をもって終了とみななければなりません。

それ以降、当会としては対豊前火力での具体的行動を何一つ組み立てていません。というよりは、具体的行動の目標というか標的をすら定めていないのです。

勿論、操業中の豊前火力発電所による顕著な公害が現実には発生しているれば、当会も行動を起こしているはずですが、むしろ具体的行動の標的をつかめないというところは、地域にとつてのさしつかえを考へるべきかも知れません。ただ、われわれの怠慢ゆえに、すでに起こり始めている公害に気がついて

ないのかも知れぬという不安は確かにあります。(たとえば、行橋を中心とした松枯れの急増が、豊前火力の操業後であることなど)

私はこれまで、よくこんなふうに書いてきました。

非力な当会が、不相応な大きな裁判闘争を打って、しかも二十頁もの機関



誌を月刊で発行し続けることで、あなたも大きな力を持った運動のようにみせかけてきたと。それは当事者として、とても気恥ずかしいやましいことだが、そんな気恥ずかしさに耐えて大きくみせかけることこそが、当会の運動戦術なのだ。実際、そう覚悟してこれまで続けて

きたのでした。宇井純さんが、新年号に寄せられたメッセージでいうところの、「マンネリズムの運動」の意義を確認し続けてきたつもりです。それが、限界にきたというのが、正直な告白です。

当会は、発足と同時に毎週木曜の夜を学習会として設定し、それはこの九年間ずっと欠かさずに続いてきました。最近では三人しか集まらないなどということもある有様で、かつての活気を思うと、もはや限界にきたというのが実感です。

その大きな原因として、当会の運動が、新たな参加者、とりわけ若い人を殆ど惹きつけえなかったという反省点があります。結局、この十年間、運動の中心に終始したのは最初からのメンバーであって、新しい人をかぞえることができませんでした。十年間走り続けて疲れた者達が、バトンタッチしようとして振り向いても、誰もいなかったということでした。

解散反対もいわれたが……「けじめ」というとき、私が一番心にかけたのは、支援者との関係です。金額をあげつらったりして恐縮ですが、たとえば毎月欠かさず三千円もの送金を続けて下さる方がいます。会の活動が活発であった頃ならともかく、停滞を重ねてきますと、それを受取るのが苦痛となってきます。当会が存在するからこそ、この方へ送金をやめることができないのではなからうかと、考えてしまいます。

「その考え方は間違っています。そんなカンパを送って下さる方は、そんなことも承知の上で送って下さっているはずですから、この会の存在意義を認めているのです」と、解散に強く反対したのは、福岡の伊藤ルイさんでした。

「あなたがそんなにそのことでこだわることなら、全国の支援者の名簿を私に見せて下さい。私が全国行脚して、一人一人に支援の真意を確かめて廻りますから」とまでいわれて、私はたじろぎました。

「いかに当事者には非力とみえても、この会の社会的存在意義は大きいし、九州電力を緊張させていることは確かなのです」というのが、伊藤さんの解散反対理由です。

当会の解散討論は内部だけでの討論で、外に向けては殆ど相談はしませんでしたが、伊藤さんのこの強力な反対論は、内部討論に持ち出しました。

しかし、やはり解散の意志をくつがえすことはできませんでした。

◇新しい出発のために

解散反対の理由を理解できながら、しかしそれに同じえなかったのは、もはやこの停滞状況はくつがえしえないだろうという現実把握が一人一人にある。このままでは自分がダメになっってしまうという危機感のゆえにであったと思われま

は命を喪っている運動を隠れミノのようにならなければ、一人一人の墮落はとめどなく進みます。

解散によって、一人一人の再びの出発が問われることになるのだという覚悟を定めねばなりません。「わしとしては、これからは豊前火力が存在する以上は、それにこだわり続けるしかないんじゃないかと、裁判がなくならなると、これとどう向き合うか、自分なりに考えてみようと思うんよ」という梶原さん。

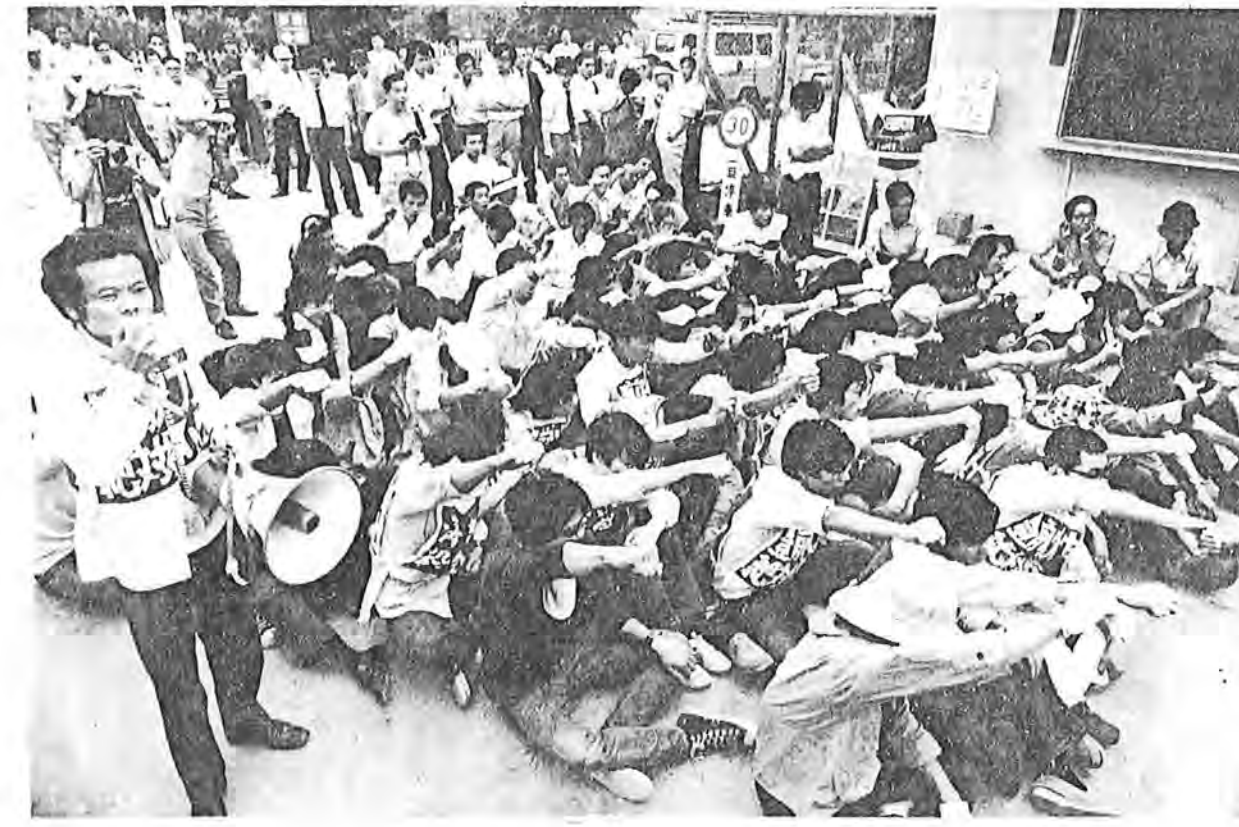
「豊前火力が進出したあとの、豊前市における経済的影響調査を、ぜひやりたいんよ。そのための調査項目の指標をいま作成中なんです、その時は豊前の人達の協力をお願いします」という坂木さん。

「ぜひ、やりましょう。吉永さんや釜井さんにも動いてもらって」と応える坪根さん、恒遠さん。

誰も、会の解散によって、豊前火力問題から逃げようと思っている者はいないのです。

次頁に稿を改めますが、当会のメンバーは解散後もそのまま殆どが「草の根の会」に残って、本誌を拠点としてあるいは独自の、あるいは共同の運動にかかわり続けていくことになっています。本当は、当会をこれまで御支援下さった一人一人、及び各種運動団体各位に解散の挨拶状を差上げるのが礼儀ですが、本誌上での報告をもって替えさせていただきます。

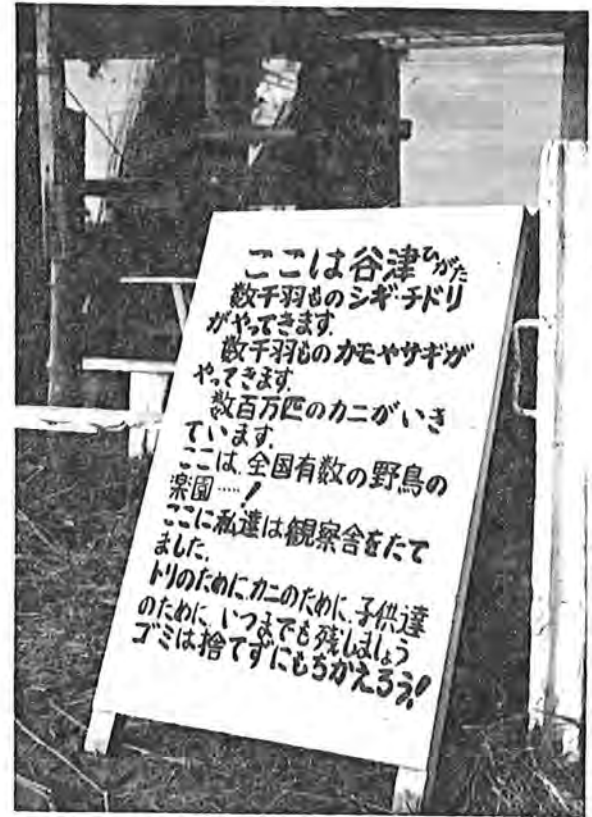
— 心からの感謝をこめて



野鳥を愛するみなさんへ
 私は、ときどき、野鳥をみにきます。
 鳥たちは、いつかやうかに、おどろ、はから、
 おどいでいます。そのすがたをみると、
~~せむし~~ 気もちがはれやかになります。
 みなさんへ、野鳥のため、
 がんば、てください。1日も早く、
 かんさつ舎、かできるやうにねがってます。

袖ヶ浦西小学校 6年 鈴木まり。

この看板は、「フローネの小屋」
 にあります。役に立っています。



ふかんど

第156号

1982.2.12

谷津干潟愛護研究会
 〒272 市川市本北方二丁目三五ノ六
 電話 0476-31-1666
 文責 森田三郎

会費 年2000

創刊
 1980.6.3

「観察舎」、がんばります。

上の文、キッと女の子なのだろう。

「谷津干潟野鳥観察舎」、今しばらく待つて下さい。森田は、決して忘れていたのではありませぬ。昨年の八月十六日に自主撤去してからといふその、ただの一日として「観察舎」のことを思わぬ日はありませんでした。

更には、「いくつかの団体の総意」というものに意を託したのです。しかし、その後の様子を見ても、あれと変わらず野鳥の会の対立が続いております。対立する感情の前には、私見ではあなが事案を見ると、干潟と、テーブルとベンチと、渡り鳥や干潟の生きものたち、運動と、干潟の環境を守ることなどと、そして「観察舎」すら、二次、軽いのではかなしいわが身を得ないようです。あっちフラク、こっちフラクで、何と知らず、特に子供たちには、見せたくない実情の方です。やはり、名実共に、愛護会がやらぬば、何の前進もないように思い知らされています。

作業をとるか、話をとるか、どっちが大事

迷ってあります

日曜日や休日のことである。

作業をしていたら、まず人と話しやその対応は出来ない。そして又、話しや説明をしていたら、まず、作業はダメである。

作業には、干潟の清掃、看板、砂いじり、小屋のこと、テーブルやベンチの修理、通信箱などがある。

人との話しには、会員、顔見知りの人、そしてここに来る市民の人達とのいろんな話し。干潟や鳥の説明、観察に、それ以外の人は、あやだころだと話しをす。

作業してついで、よく話しかけられたり、聞かれたりするのである。勿論、黙っているわけにはいかない。が、ズバリ言うと、面倒くさい時が少なからずある。そのたびに作業が中断して、捗らないからだ。

最近、「谷津干潟友の会」というのをやり始めてから、ますます迷うようになっってしまったのである。

「両方とど、大事だと思ふ。今までは、作業の方に、ずっと力を注いできていた。大なり小なり、話すことを少なくしてきた。個人プレイが圧倒的なのだ。しかし、それでは、干潟に関係する人達の中でき、はるかに多くの人と接し、話しを交えてきたと思っではいる。

一日中、言葉少なく、殆んど誰とも口をきくこととなく、ひたすら黙々といっしょに何でもかをやっていた、その頃がなつかしくなることがある。誰か賛成しようか反対しようか、あるいは、他の人がどう思おうか、そんなことにはかまう気にならず、やることしか考えなかった頃である。

しかし、この頃は、出来るだけ人と話をするように努めている。これでき、です。内外とどに、そうしなくてはならないようになってきたようだ。内とは、会員からこんなことを言われた、「森田さんよ、アンタが日曜日ぐらひはあんまりやるなよ。アンタがスゲー綺麗してバシクやってんよ、人はすよ」と近づきにくいんじゃないか。そうあね、森田さんの考えや、やってることに賛成する人多いと思うよ。でどね、いっしょにやろうとした人できさあ、一回、んだなあ、「日ぐれえだろうなあ付き合うのは、次の日なったらよあ、腰が立たなくなっちゃってよあ、バツクリしちゃうってえどう来ぬえんじやぬえかなあ。オレだって、ブルッちゃつ出来ぬよあ。あの人は特別な人、だなんて思っちゃうよ。だから、一時位^旬やったらさあ、あとはミイディングみたくしてさあ、時にはこの辺の草はらでフォークダンスとか合唱なんかした方がいいんじゃないか。若い人、来ないよあしと。またくその他にもあ。一人ではない。外とは、すなわち、干潟が有名になったこと。人がたくさん来ることと、近くに住む人が多くなったことなどである。

ときどきみかたにきた時に、ごみがおちていた
ら、ひろいほうに、また、ごみをとるとき、おちくうい
れいになっているか、みてもみません、ごみをと
りにきでかにかいっばい、とれるといいて、ま
おいさせんか。もし、ほくか、つもがっていた
うあきてしまいます。

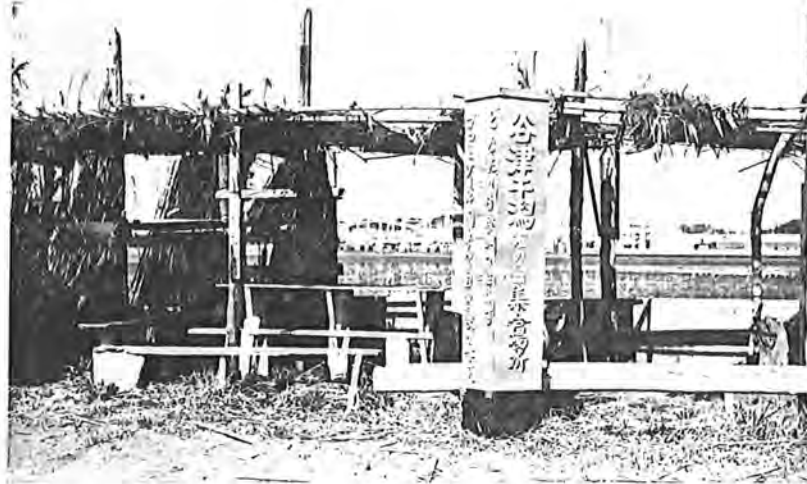
高橋

前より海がきれいになったから、うれしい。おじさん
たちがせかくきれいにしてくれたから、これから
はせつたいによごさないでほしい。ほくは、かた
が大すきです。だから、ごみをちうか、ないて、ほ
しい。だから、ときどき、みかたにきた時、ごみか、お
ちていたら、ごみをとろうと思う。そして、ごみをおとす人
か、いたら、その人をちうかしたい。

阿部

前来た時は鳥かいつばいて、日曜日にクテた
から、ここのかいた、海が広くなって、橋がなかった
から、つりかかけの橋をわたって、橋を
つたかたをよごさないようにしよう。新山

干潟に沢山の鳥がいるのは、おどろき。その鳥の
鳥が、飛んでいる姿は、おどろき。飛んでいる角度によって
鳥の色が変わって見えるところ、おどろき。とても、素晴らしい。
おどろき。鳥の住居が、下り並んでいる。おどろき。干潟の
貴族の思わぬ。是非、存続を祈る。願、2や3回。
82.2.11



一月十二日。場所・「フローネの小屋」。
製作・五十嵐塗装店(アイディアとです)。

ふがんど

ホ157号

1982.2.13

谷津干潟愛護研究会
〒272 市川市本北方二丁目三五番六
電話 0476-1-6668
文責 森田三郎

会費 2000

創刊
1980.6.3

谷津干潟友の会 集合場所
どなたでも参加できます
毎週日曜日 11時～13時
ファミリーや図かんを自由に使う下さい

一木の小屋」にマッチしていませんか?
お、オヤジが書いたんだよ。『一』と。
それにしてはこの看板、うしろの『フロ
ンですかあ、うまいねえ、いい字だねえ』
んでしょう。私が、『あれ、どう出来た
さすが、本職です。どうです、立派なと
。すると、『いやあ、オレじゃあなりよ
さすが、本職です。どうです、立派なと
んでしょう。私が、『あれ、どう出来た

豊富な流木 - 谷津干潟万才!



いかがでしょうか。こういうベンチは、
とくに、団地の方々が気に入ってるんです。

こゆさ外てしまったベンチの代りに、又
一つ作りさせていただきました。
この流木、かなりの向あちこちと漂い流
れてきたようです。角がまるまっちゃって
、おまけにバツクリと口をあけてしまいま
した。
ある人が言いました、「森田さん、これ
でどベンチですかあ?、何だか企業庁に、
「こっちに来るな...」と言ったみたによ
しと。そう見たのは、風流を解せない人だ。

御利用下さる皆さまへ
前略

谷津干潟にて、皆さまがご利用なさ
ついでに、二百数十の施設なるもの
、実は、皆流木よりなりつてゐるものばかり
にございます。当方はただ、「ヨコになっ
てゐるものを、タテにした」だけのこと
です。御礼と感謝は、どうか「流木さん」に

申し上げて下さいます。
閑話休題、潮の干満という、一日二回の
いわゆる「定期便」にて乗って来くる彼ら
は、大潮の時に多いようです。とくに、台
風の時にはそれこそ「千客万来」の観があ
ります。金銭にすれば大変なものです。
どうか皆さま、こゆさを愛護会の「物件
」、あるいは「資産」などと、カリそめに
におっしゃらないで下さいませ。早々



出来ました、「谷津干潟・友の会」の東
内板です。この辺一帯、看板だらけ...

これも、流木です。か、今は東内板にな
ってどらって、大いに「代弁」の役を務め
ております。
「谷津干潟・友の会」と言ったら、どっ
ちみち中味は森田さん産のグループなん
しよ、ほら、あの「金太郎アメ」みた
ってさあ、いや、いや、そんな
ことはない、絶対ありません、失礼な

ふかんど

№158号

1982.2.14

谷津干潟愛護研究会
 谷津市本北方二丁目三五ノ六
 〒272 電話 0476-166668
 文責 森田三郎

会費年2000

創刊
1980.6.3

まだ、寒いけれど 2/7

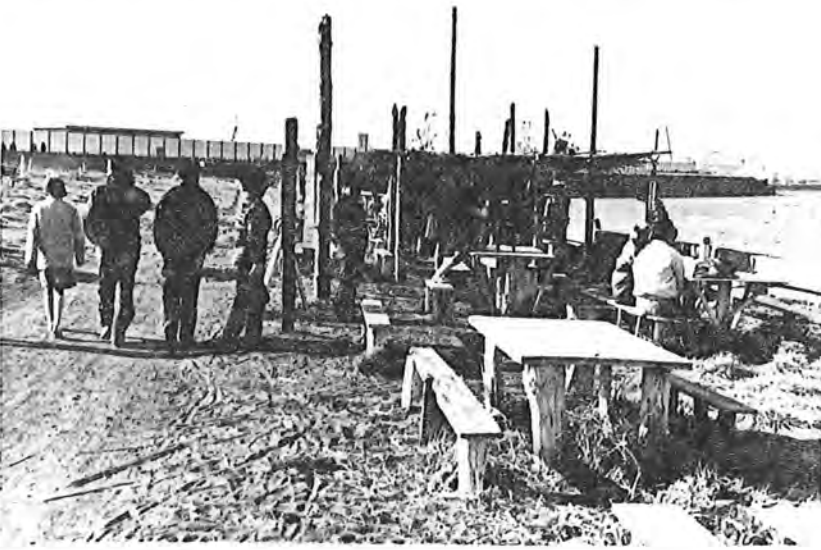
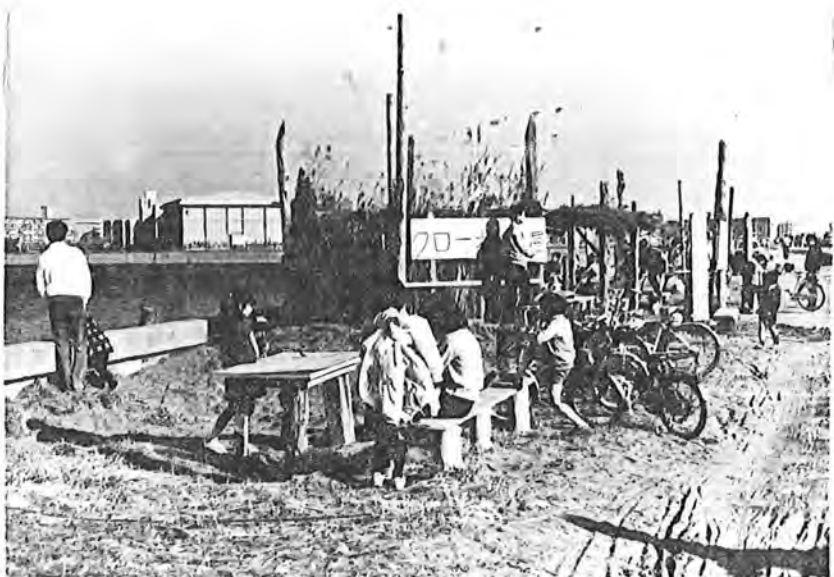
現在、谷津干潟の南がわと北がわで、とくに力を入れていることが行なわれ
ております。

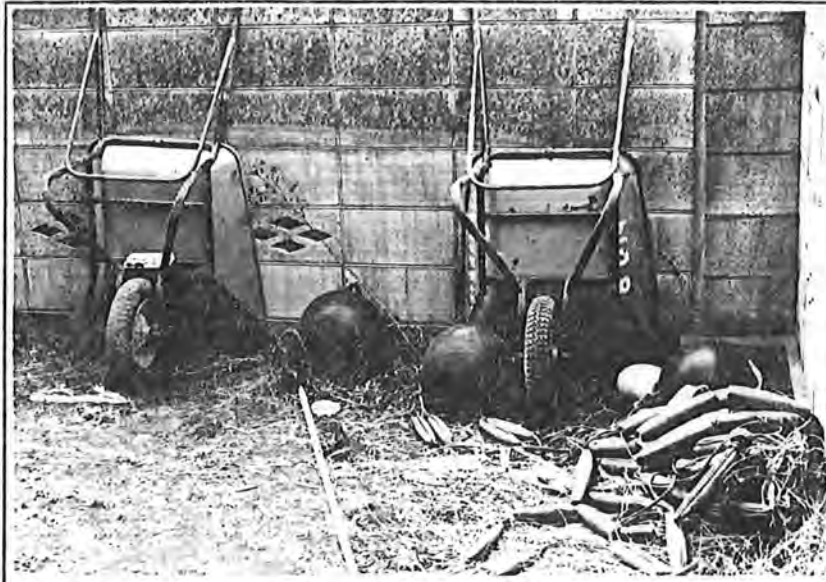
ふだんの日は、北がわの、谷津三丁目の

所で、干潟の造成・改善、そして清掃が。日曜日(午後)・休日は、テーブルとベンチの所で、「友の会」の観望、清掃、その他のボランティア活動が行なわれている。温かなれば、写真の所にとっとたくさんの方が来ます。どう対応しましょうか？

お願いです

とはや、谷津干潟の現状は、「野鳥観察舎」・「公衆トイレ」の設置がどうしても必要になっております。会員は勿論、とくに干潟に来る市民の為に、少しでも多くの人の希望を新聞・テレビなどに、伝え、届けてくれないでしょうか。





「さあ、今日とまた、泥だらけになって、
「エラしごと」かあ、ー、ー。そう思いな



がら、干潟近
くの私のアパ
ートに行きま
した。エノウ

袋を部屋の中から取り出し、そのまゝ庭
へまわった。いつものように、一輪車の
所へ行ったら「何か、得体の知れない物
しがあった。チョコレートだった。「ま
さかっ、」「でと変だなあ、ー、ー」と。
「そうか、今日はバレンタインデーだっ
た」。しかし待つよ、
イタズラかな、ー、ー、毒
でと入休であるかとも知れ
ない、ー、ー、。

「あ、う、いいいやない
か、きつと、池内淳子
の如き女性か、そつと
オレを見つめていたのだ。

みかみかん

2/14

ぼくは
田舎
だよ

な
め
な
よ

おわがし、
「はとりせかにがいますよね」
きたなくすると、とツヤカ
だから「みくすかんす」
とか、しょうすの「かんす」
うにしてした、
スん、
だから「みくすかんす」
だ、
（?）



ふかんど

№159号

1982.2.15

谷津干潟愛護研究会
 〒272 市川市本北方二丁目三五番六
 電話 ☎ 五三二一 六一六六八
 文責 森田三郎

会費年2000

創刊
1980.6.3

谷津干潟愛護会様へ。

私はうたてか、そんなに強くなことは
 知りませんでした。
 沢山の魚やカニなどが、いしょにうめたてらいて
 いるのですね。
 はじめはなんとも思わなかった野鳥に最近
 は親しみを感じます。
 鳥ってかわいらしいですね。

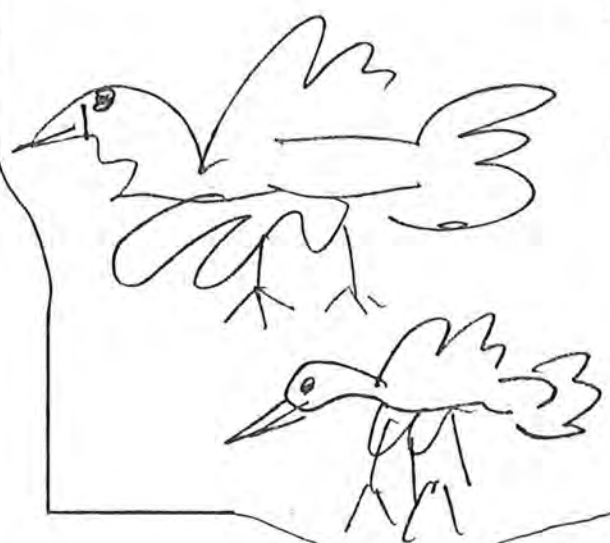
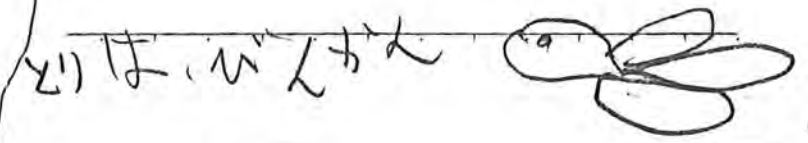
習志野市谷津3-13-8-703

高橋奈子
 紀姐

「研究」もやってるんですよ。
 ちゃんと。お忘れなく...

この先は 何か待つやら
 人に聞け
 為すと想いに
 身をたくす

ふかんど太郎、谷津干潟



とりはたさんで
 もらおとんで
 いて。おもしろい

ヘリコプターの音に飛び立つ
 カモの群



「はい、これ森田さんのギプスよ、こんな
にっぱらソラクがキしたもんなんつえ、見た
ことないわあ、。記念品」にとつてお
きなさいよ、とう二度と事故なんて起こさな
いようにゆ」。
五十二年六月、生まれて初めて、病院の白



いシーツのベッドに寝た。任事中、交通
事故に会い、スネを砕いてしまったので
ある。脚は台にしばらくつけられ、寝返え
りも打てなかった。首を動かすと見えろ
、窓越しの四角い空と、緑の夏木立がと
とと気休めになった。

つい昨日まで、荒川の河口、葛西埋め
立て地から、千葉市・花見川の河口、幕
張埋め立て地にかけての広大な海岸地帯
で、渡り鳥の繁殖調査をしていた。それ
が今日は、ベッドから一歩も出られずし
まい。調査は中断。想いは、夏の空の下
なるコアジサシ、シロチドリ、コチドリ
などがヒナをかえしている、貝ガラと砂
と草原、水溜まり、干潟のことであった。

吉野孝・習志野市長に
届けようか

皆さんは、どう思います。

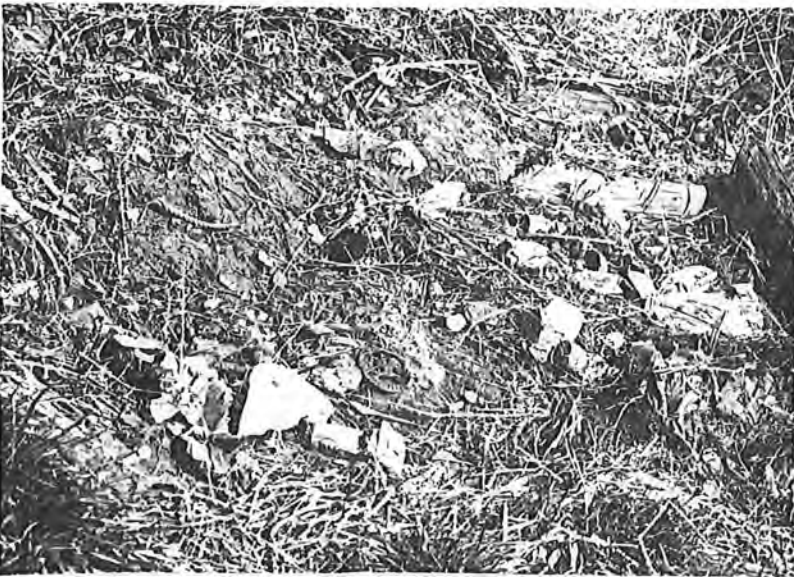
これだけのもの、何で風に吹かれてとんで来た
り、海から流れてくるものですか。

私は、今すぐにでも、吉野孝氏と、これ

らのゴミの処置とその責任をめぐって、
踏み込み、「とっくみ合い」を始めたい。
又、我々を批判し、この現実から身を引
いた自然保護団体すべつに、「批判は行
政に、自身を引くも、ゴミは有り」と言うか。

1982年
2月7日

土の中から続々と出てくる、
鉄クズ、ガラス、カワラ、コ
ンクリート、その他各種。



最後まで捨てつづいたのは、共産党のメンバーの人。同党とある団体は好意。でも黙ってらへんよ。

ふがんど

№160号

1982.2.16

谷津干潟愛護研究会
 〒272 市川市本北方二丁目三五番六
 電話 ☎ 571-1666
 編集 森田三郎

会費年2000

創刊 1980.6.3



2/4 アオサギ
 舌はし。きいろい
 はねはいいい

とくちょう
 目のところに黒いはねがっついていていた
 つるのようだった。

あおさぎを初めて見ました。次に来たときは、
 もう一ツ名前をおぼえるようになります。
 オキさんありがとう 5年男児代筆

習志野市津田沼 3-20-18-103 78-3780

島田 恭子

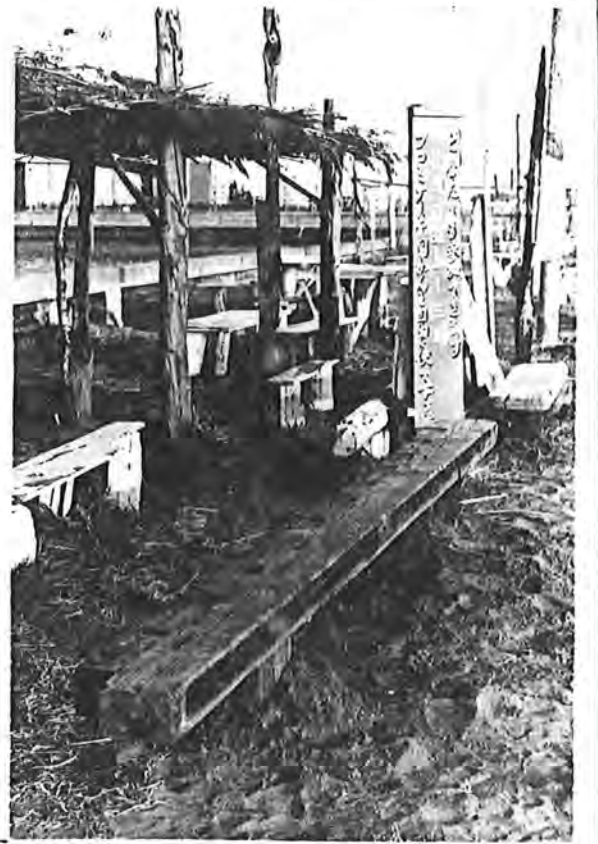
1982年1月24日(日) 午後
 オキさんが多いようです。
 池に遠くまで行ってはよく見えたかたがツラキをわがりました。
 回りはミコヒツキもあいました
 あいぐいのみしたオキも4羽くらいあいました。
 また春に来ようと思っています。

いろいろな鳥がいてとてもおもしろく、飛んでいる姿はオキとオキの
 ちがいが大したものとおもっています。

オキさんかごみ
 かんずめをすてなく
 なたら。 ぼくは
 男だよ

みなさんかごみをすてなく
 なたらかにやとりはよ
 くてやね。みなさんは
 とりやまにかすきでし
 くのとりやか米にかりなく
 なってしまうかをし
 ないからびり
 をすてないよう
 しましように
 たあ
 (???)

重労働です、ベンチ作り



そうですね、かなり体格の良い人でと、三つ作ったらフラク〜になります。

ガツミリしたものを作らないと、こわさかしてしまうのである。座って使うだけなら、こぎれいな、恰好の良いベンチが出来ます。しかし、谷津干潟の「現実」は、そんな甘っちょろいじゃないのです。

子供たちにとって、ベンチは、単に座って腰かけるものではありません。庭が道具なのです。ベンチの上でかけたリ歩いたり、ジャンプなどをしています。私達は、そんなベンチの使いみちの一つだと思っただけです。又、こわしていたり、こわさかたベンチを見て、実は、誰か注意しないし、修理してくれないのです。

こわからは、こうした丈夫なベンチを、少しずつ作っていきます。

まず、干潟に流木ついている流木の中から、よさそうな木を見つけます。それらを、堤防の下まで引っばって来るのです。

二月十四日(日) 高木世史君が二つとど作ってくれました。「フローネの小屋」の前



強くて丈夫な木でなければいけないし、今まで水の中にあつたのですから、とってど重いのである。今度はロープでゆわえ、堤防の上に登ってかき、思い切って引っ張り上げる。大きいと、簡単には上がりません。ロープを何回と堤防に強く押しつけ、そのつど少しずつロープを持ちなます。厚いゴム手袋を使っているのですが、熱くなり、ゴムがはかばか、ゴムのこげる匂いすらします。軍手では、重さの為、すべってしまう。殆んどは一人でやっている。とってど重い時は、一端をロープで持ち上げておき、近くのテーブルやベンチの柱にゆわえ、そして、他の端の方のロープを引っ張り上げる、そんなふうには、いっさい頭を使っています。

草ムラの中を、所定の所まで引きずって来て、穴を掘る。深い時は、一米位を掘ります。つまり、ガツミリ掘って、ガツミリ柱を立て、ガツミリ踏みかためて、かすがいでガツミリとめるのである。そして一服〜。